

子どもたちに 聞かせたい創作童話 第46集



鹿 児 島 市
鹿 児 島 市 教 育 委 員 会 編
公 財 団 法 人 鹿 児 島 教 育 文 化 振 興 財 団

子どもたちに 聞かせたい創作童話 第46集

鹿 児 島 市
鹿 児 島 市 教 育 委 員 会 編
公 益 財 団 法 人 か ご し ま 教 育 文 化 振 興 財 団

刊行のことは

鹿児島市と鹿児島市教育委員会、公益財団法人がごしま教育文化振興財団では、「子どもたちの夢をはぐくみ、美しい心を育てたい」という願いのもと、「子どもたちに聞かせたい創作童話」を募集してまいりました。

四十六回目を迎えた今回は、県内はもとより国内三十六の都道府県から、第一部、第二部合わせて一九八点もの応募がありました。また、年齢で見ますと、十代から九十代の方まで幅広い年齢層から、作品をお寄せいただきました。

「子どもたちに聞かせたい創作童話 第46集」では、ご応募いただいた作品の中から、特選、入選に選ばれた八作品をご紹介します。身近な日常を描いたものからファンタジーなものを取り扱った作品は、どれも子どもたちの夢をはぐくみたいという思いの込められたものになっております。

この作品集が、保育園や幼稚園、小学校等の教育現場のほか、図書館や公民館等のコミュニティにおいて、本の読み聞かせ等の読書推進活動に活用されますことを期待します。

また、市民の皆様が文芸活動の一環としてこの創作童話集を活用され、今後、未来を担う子どもたちの豊かな感性や優しい心をはぐくむ優れた作品を発表されますことを願っております。

終わりに、全国各地から応募していただいた方々をはじめ、作品を審査してくださいました五名の先生方、さし絵を描いていただいた四名の先生方、そして、この作品集の刊行にあたってご尽力いただきました関係者の方々に心より感謝申し上げます。

令和七年二月

鹿児島市
鹿児島市教育委員会
公益財団法人がごしま教育文化振興財団

目次

刊行のことば	1
「第46回 子どもたちに聞かせたい創作童話」受賞作品	4
第一部 特選 「海からの電話」	5
第一部 入選 「ふしぎな野の花カフェ」	20
第一部 入選 「まほうのおえかきペン」	37
第一部 入選 「わたしもおねえちゃん」	52
	にしお ちえ
	オガワ メイ
	中村 れいこ

第二部 特選 「あかり」	こんどう みえこ	68
第二部 入選 「おばあちゃんのハレの日ごはん」	ふじのたかみ	86
第二部 入選 「お雪のぞうり」	吉村 洋一	103
第二部 入選 「ぼくの素敵な友だち」	樋口 達也	120
総評	140
入賞作品の選評	142
「第46回 子どもたちに聞かせたい創作童話」募集要項	147
応募状況	148

「第46回 子どもたちに聞かせたい創作童話」受賞作品

〈第一部〉保育園児、幼稚園児、小学校低学年を対象にした作品

特選	海からの電話	中村 れいこ	茨城県
入選	ふしぎな野の花カフェ	オガワ メイ	東京都
入選	まほうのおえかきペン	にしの 桃子	愛知県
入選	わたしもおねえちゃん	わしお ちえ	大阪府
佳作	ノラネコ学園へようこそ	かんだ ゆう子	鹿児島県

〈第二部〉小学校中・高学年を対象にした作品

特選	あかり	こんどう みえこ	東京都
入選	おばあちゃんのハレの日ごはん	ふじのたかみ	福岡県
入選	お雪のぞうり	吉村 洋一	宮崎県
入選	ぼくの素敵な友だち	樋口 達也	福岡県
佳作	灰色たんぼぼ	高橋 生馬	和歌山県

海からの電話

中村 れいこ

『海に行ったこと』

サラちゃんは、さつきから作文用紙とにらめっこしています。

きのう、家族で海に行ったこと書こう。

でも、どうやって書けばいいのかなあ？

サラちゃんは、きのう海でひろってきた白いまき貝をながめました。

真っ白で、少しごつごつしていて、どこもこわれていない完璧なまき貝です。

海水浴場のとなりの岩の上でお父さんと見つけました。

これを見つけた時が、一番うれしかったな。そうだ、そのことを書こう！

『海で、きれいなまき貝を見つけてうれしかったです。』

あれ？ もう終わっちゃった。作文で、むずかしいなあ。

その時、

「もしもし、だれかいませんか？」

声こえがしました。

だれ？ どこ？

サラちゃんは、きよろきよりました。

「もしもし、きこえますか？」

まき貝がいの中なかに何かなにかいる!?

サラちゃんは、恐おそる恐おそるまき貝がいをのぞきこみました。からっぽです。

「だれか、いるの？」

「やれやれ、よかった。電話でんわをかけたかがありました。失礼しつれいですが、あなたはどなたで

すか？」

「わたしはサラ。あなたは、だれ？」

「これは大変失礼たいへんしつれいいたしました。私わたくしは、やどかりのパスカルと申もうします」

「やどかり？」

サラちゃんは、もう一度いちど、まき貝がいの中なかをのぞきこみました。何も見みえません。



おくの方かな？

まき貝をふってみました。

もしかして、まき貝からぬけ出して、そこらへんにいるのかもしれない。サラちゃんは、机の下までのぞいてみました。だけど、やっぱり何もいません。

「ねえ、パスカル、どこにいるの？」

「どこって、もちろん海です。きょうは、おねがいがあつて、こうして、海から電話をかけているんですよ」

「海からの電話なの？」

「そうです」

サラちゃんは、まき貝を、耳に当てました。

「おねがいて何ですか？」

やどかりのおねがいて、いったい何でしょう？

「はい、実は、ちよつと目をはなしたすきに、私の大事な貝がらが、なくなってしまいました。ええ、そうです。サラちゃんが、今持っているその白いまき貝です。それで、そのまき貝を返していただけかなと思ひまして、お電話したわけです」

「だって、これ、岩いわの上うえに落おちてたんだよ」

「いえ、落おちていたのではなくて、おいてあったのです」

パスカルが、すぐに言いいました。

「つまりそれは、私わたくしの新あたしい家いえでして、ひっこす前まえに、よくそうじをして、かわかしていたところだったのです」

「だって」

サラちゃんは、白しろいまき貝がいを見みつけました。

「だって、これ、サラが見みつけたんだもん」

「そうおっしゃらずに、どうか、返かえしていただけないでしょうか？」

パスカルの声こえが、まき貝がいの中なかからびんびんびびきます。

「ええ、もちろん、ただでとは申もうしません。かわりに、私わたくしが今いま使つかっている家いえを差さし上あげるというのはどうでしょう？ 少ち々じ小こぶりではありますが、何なんと言いっても、虹色にじいろのまき貝がいで

すから」

「虹色にじいろなの？」

サラちゃんの心こころが動うごきました。

「はい、みごとな虹色にじいろです」

「でも、どうやって返せかえばいいの？ サラは、ひとりじゃ海うみに行けないし」

「おやまあ、もちろんひとりで来こられますよ。こうして、電話でんわしているくらいですからね。もう、半分はんぶん来ているようなものです」

「そんなこと言いったって」

「あとはもう、頭あたまの中なかで、考かんえるだけでいいですよ」

「考かんえるって、何なにを考かんえればいいの？」

サラちゃんは、思おもわず身みを乗のり出だしました。

「まず、目めをつぶります。これは、すぐく大切たいせつです。次に、その白しろいまき貝がいを見みつけた岩場いわばを思おもい浮うかべてください。なるべく、くわしく。そう、岩いわや海うみの色いろは、特とくに大だい事じです。それから、まき貝がいを耳みみにあてて。さあ、何なにか聞きこえませんか？」

「パスカルの声こえが聞きこえる」

「そうじゃなくて、私わたくしの声こえのほかになにか聞きこえませんか、という意味いみです。さあ、じっと耳みみをすましてください」

やっぱりパスカルの声こえしか聞きこえません。と思おもったら、あれ？ 何なにか低ひくい音おとがします。

「あ、何か聞こえるかも」

「その調子です。サラちゃん、がんばって！」

ザザッザー、ザザーン、ザザー。

「波の音かな？」

「そうです！　それが、すぐ近くで聞こえるようになったら、もう目を開けてもいいです

よ」

波の音は、だんだん大きくなってきたような気がします。だけど、もう目を開けていいのかなあ？　まよっている、ぴしゃっと、足に水がかかりました。

「きやっ！」

「すばらしいです！　サラちゃん！」

パスカルのさけび声にして、サラちゃんは、海べの岩場に座っていました。目の前の岩で、やどかりがサラを見上げています。

「パスカル？」

「はい、私です。貝がらをひろったのが、サラちゃんて本当によかった。私は、実に運がいい」

パスカルは大げさに、はさみをふり上げながら言いました。そんな風に言われると、サラちゃんも、うれしくなってきました。

「まさか、ほんとに、海に来られるなんてね」

サラちゃんは、あたりを見まわしました。

海だ！　ここで、きのう、このまき貝をひろったんだ！

サラちゃんが、白いまき貝を岩の上におくと、

「ああ、私の家に、まちがいありません」

パスカルが、白いまき貝に向かって走りだしました。

「ねえ、待って。パスカルの家は、ちっとも虹色じゃないわ。ただの灰色じゃない」

サラちゃんは、がっかりして言いました。

「虹色ですとも。ただし、それはもちろん部屋の中のことです」

「いくら、中がきれいでも、外からじゃ見えないもん」

サラちゃんが、口をとがらせると、

「わかりました。それでは、ちよっとお待ちください。準備してまいりますから」

パスカルは、まき貝の中に引っこんで、すぐにまた顔を出しました。



「お待たせいたしました。サラちゃんを私の家にご招待いたします。百ぶんは一見にしかずと、申しますからね」

「百ぶんは何？」

「見なきゃわからないという意味です」

「でも、どうやって見るの？」

「おやおや、またそんなことを。サラちゃん、目をつぶって、それから、どうするんでしたっけ？」

「頭の中で考える」

「そのとおり。だんだんわかってきましたね」

パスカルが、満足そうに言いました。

サラちゃんは、目をつぶって、灰色のまき貝の入り口から少しだけ見えている虹色の続きを思い浮かべました。

「どうですか？」

目を開けると、そこは、虹色の部屋の中でした。

天井はゆるくカーブして、動いたびに、虹色が、波うつようにゆらゆらゆれます。

息いきをするのも忘れわすそうにきれいです。

おまけに、部屋へやのまん中なかにあるテーブルの上うえには、ぷるぷるゆれるゼリーとお茶ちやまで用意よういしてあります。

「この部屋へやでのお最後さいごのお茶ちやを、サラちゃんのごいっしょでできるなんて、この上うえない幸しあわせです」

パスカルは、大おおげさにおじぎをしました。

サラちゃんは、ゼリーから目めがはなせません。

「海うみの色いろね」

それから、ぱくんと口くちに入いれました。

「おいしい！ ペパーミント味あじだ！」

パスカルは、ハサミでスプーンをきょうくにぎってゼリーを食たべながら、
「海かいそうでかためるゼリーは、私わたしのとくい料理りょうりですから」

「ねえ、何なんでそんなことができるの？」

サラちゃんは、思おもわず聞ききました。

「だってほら、ふつうやどかりは、そんなことしないでしょ？」

「私わたくしのご先祖様せんぞさまは、代々だいだい、竜宮城りゅうぐうじょうにつとめておりましたのでね」

パスカルは、それですっかり説明せつめいがついたというように、うなずきました。

サラちゃんは、虹色にじいろの部屋へやをぐるりと見みまわしました。

「ねえ、パスカル、もしこの貝かいがらが、わたしのものになったら、いつでもここに来こられるの？」

「そうなりますね」

それなら決きまりです。

「いいわ、パスカル。白しろい貝かいととりかえっこしてあげる」

「そうこなくっちゃ」

パスカルは、はさみをかちやかちやならしながら言いいました。

「ついでにおそうじも、よろしくおねがいしますね」

「おそうじ？」

サラちゃんは、ドキッとしました。

自分の部屋へやのそうじも、さぼってはっかりで、お母かあさんによくしかられます。

「部屋へやを美うつくしくたもつのに、おそうじはかせません。ほこりをはらってから、かわいた

タオルでふくと、さらにつやが出ます」

「わかった、やってみる」

サラちゃんは、しぶしぶうなずきました。とくいじゃないけれど、この部屋のためなら、がんばれる気がします。

「ああ、きょうはいいことばかりです。きょうのことは忘れません」

パスカルが、言いました。

「わたしも！」

「それでは、そろそろまいりましょうか」

サラちゃんは、あわてて残りのゼリーを口にほうりこんで、目を閉じました。目を開けると、パスカルが、もう白いまき貝から顔を出しています。

「広々としていて最高です！」

パスカルのうれしそうな声を聞いて、サラちゃんも、うれしくなりました。

「そうだ、いつか、こちらの白い家も、サラちゃんに差し上げますよ」

「え、いいの？」

「貝がらを大切にしていただけの人に出会えたのは、この上ないよろこびですから。お尻

がつかえるようになったら、また電話します」

「その時は、またいっしょにおやつを食べようよ。今度は、サラがお菓子を作るね」

「それは、なんと楽しみな。それでは、サラちゃん、今度は、虹色のまき貝に電話します
ので、それまで、なくさないでくださいね」

「いつも机の上においておく」

「すずしい風が、サラちゃんの髪をゆらしました。

空がうすいむらさき色にそまり始めました。

「サラちゃん、帰りは」

「目をつぶって、サラの部屋を思い浮かべればいいんでしょ？」

「そのとおり。すっかりお手のものですね」

「それじゃ、またね、パスカル」

サラちゃんは、パスカルに手をふって、ぎゅっと目をつぶりました。

「サラちゃん、大丈夫ですかー？」

パスカルの声がひびきました。

目を開けると、サラちゃんの部屋です。

「大丈夫よー、パスカル！」

それっきり、パスカルの声は聞こえなくなりました。

サラちゃんは、灰色のまき貝を、机の上におきました。中が、どんなにすてきな虹色が、サラちゃんは知っています。

パスカルから、電話が来た時のために、時々そうじをして、そうだ、それから、お母さんにクッキーの作り方を習わなくちゃ。

広げっぱなしの作文が窓からの風にぴらぴらゆれています。

サラちゃんは、『海に行ったこと』を、消しゴムでごしごし消しました。

それから『やどかりのパスカル』に書き直しました。

うん、これなら書けそうです。

ふしぎな野の花カフェ

オガワ　メイ

春休み。

ねねちゃんは、おばあちゃんのおうちにあそびにきています。お父さんもお母さんも、おしごとにいっています。

もうすぐ十二時。

ねねちゃんのおなが、ぐう、と鳴りました。

「ねねちゃん、おなががすいたでしょう。おひるごはんができたよ」

おばあちゃんが、おぼんにごはんをのせてはこんできました。

ところが、テーブルにならんだおかずを見て、ねねちゃんはがっかり。

土みたいな色のおかずばかりなのです。といっても、ハンバーグやカレーではありませ
ん。見たことのない食べものです。

「おばあちゃん、これ、なあに？」

ねねちゃんは、おさらの中をのぞきました。

「これは、ふきのとうのつくだに。こっちは、新じゃがいものところかし。春にとれるものだよ」

おばあちゃんは、ていねいにおしえてくれます。

「食べたことがないものばかり」

「えいようがあるから、食べてごらん」

「うーん」

なんだかおいしくなさそうです。

「わがままいわないの」

ねねちゃんはしかたなく、ふきのとうのつくだにを、おはしでつまみました。

「ううっ」

口の中に、にがいあじがひろがって、むねが、むかむかしてきました。

「うええ」

とうとう、ねねちゃんは、つくだにをはきだしました。

「あら！ 食^たべものをそまつにしたらばちがあたりますよ」

おばあちゃんが、おこりました。

ねねちゃんは、なきたくなりました。

「もういらない！」

ねねちゃんは、おはしをテーブルにおくと、げんかんからとびだしました。

おばあちゃんのおうちのまわりは、はたけばかり。

となりにはずぐらい林^{はやし}があって、今^{いま}にもおばけが^で出てきそうです。

ごきんじよは、古^{いに}いおうちがおおくて、ねねちゃんがすんでいるようなマンションなんてひとつもありません。

チラチラ、ヒラヒラ。

白^{しろ}いちようちよが目^めの前^{まえ}をとんでいきます。

ちようちよを見る^みのは、ひさしぶりです。

あとをおいかけると、ちようちよは、さくをこえて、むかいの家^{いえ}のにわにさいている花^{はな}にとまりました。

赤^{あか}、白^{しろ}、黄^{きいろ}色^{いろ}。

にわには、色とりどりの野の花があふれるようにさいています。

「あ、タンポポだ」

ねねちゃん、しゃがんでタンポポに手をのばしたときです。

タンポポ　タンポポ　おいしくなあれ

ノビル　ノビル　おおきくなあれ

どこからか歌がきこえてきました。

タンポポ　タンポポ　おいしくなあれ

ノビル　ノビル　おおきくなあれ

「ああ、こしがいたい」

のびた草の間から、黒いワンピースをきた女の子の人が立ち上がりました。いくつくらいでしようか。お母さんよりは、わかく見えます。

女の^{おんな}人が^{ひと}がこしをとんとんたたくと、せなかのみつあみが、ぼんぼんはねました。
右手^{みぎて}には、草^{くさ}がたくさん入^{はい}った竹かごをもっています。
女の^{おんな}人とねねちゃんの目^めが、ぱちんとあいました。

「あら。かわいいおきやくさん。まいごかな」

「ううん。おばあちゃんちにきたの」

ねねちゃんがいました。

「ああ、村上^{むらかみ}さんのおまごさんかあ」

「おばあちゃんのこと、知っているの？」

「おむかいだもの。よく知っているよ」

おばあちゃんを知^しっているときいて、ねねちゃんは、すこしあんしんしました。

「わたしは、チャコ。あなたの^{なまえ}名前は？」

「ねね」

ねねちゃんは、小さい^{ちい}声^{こえ}でいいいました。

「ねねちゃんね。かわいい」

ふふっとわらうと、チャコさんのほっぺにえくぼができました。



「なにをしているの？」

「花をつんでいるのよ」

「花？」

ねねちゃんは、まわりをぐるりと見回しました。

カラスノエンドウ、タンポポ、シロツメクサ。野の花がいっぱいです。

ねねちゃんは、花が大すきです。小さな花でもガラスのびんにさすと、おへやのふんいきが一気にはなやかになります。

チャコさんも、おうちにかざる花をつんでいるのかもしれない。

「いっしょに、てつだってくれる？」

ねねちゃんは、こっくりうなずきました。

「わかくて、やわらかそうな花をとってね」

チャコさんはいいました。

ねねちゃんは、かわいいタンポポをつんで、かごにいれました。

かごの中に、あめだまみたいな丸いきゆうこんが入っています。

「これはなあに？」

「ノビルっていうの。ほら、これをぬくと、土つちの中なかから出てくるの」

そういうと、チャコさんは、ニラのように細ほそ長い、みどりのはっぱをひっぱりました。つるん、と土つちの中なかから白しろいきゅうこんが顔かおを出だしました。

「わ、かわいいいきゅうこん」

ねねちゃんは、ノビルもたくさんとりました。

「このくらいでいいかな」

かごが野のの花はなとノビルでいっぱいになると、チャコさんがいきました。

「たすかった、たすかった。ねえ、よかったらランチ食べていかない？」

ねねちゃんは、首くびをよこにふりました。

「お金かねをもってきてないの」

チャコさんは、わらいました。

「かわいいおきやくさんから、お金かねをいただくわけにはいかないよ。村上むらかみさんには、いつもお世話せわになってるもん。食たべて行って」

ねねちゃんは、チャコさんのあとについて、げんかんの前まえに立たちました。

とびらの右みぎがわのかべに、かすれた文字もじで『野のの花はなカフェ』と書かかれたプレートがはっ

てあります。

「カフェなんだ」

「そうよ。いらっしやいませ。おきやくさま」

チャコさんは、ていねいにおじぎをして、ねねちゃんをむかえてくれました。

お店の中はピカピカのフローリングになっていて、丸いテーブルにはピンク色いろのかわいい花はながかざってあります。まどから、おひさまの光ひかりがさしこんできました。

「すてきなカフェ」

ねねちゃんは、思わず声こゑをもらしました。

「ありがとうございます」

チャコさんはうれしそうにわらいました。

「どうぞ、すわって」

ねねちゃんは、まどぎわのせきにすわりました。木きのかげがゆれて、さらさらと音おとがします。すこしあいたまどからは、みどりの風かぜが入はいってきて、カーテンをゆらしました。

「すぐできるからね」

そういうと、チャコさんはキッチンで、おりょうりをはじめました。

タンポポ ノビル シロツメクサ
カラカラカラリ カンカラリ

いいにおいがただよってきます。

「天ぷらのおいだ」

天ぷらは、ねねちゃんの大こうぶつです。

ぐう、とねねちゃんのおなかが鳴りました。

「おまたせ」

チャコさんがはこんできたおりようりを見て、ねねちゃんはびっくり。

「これって、もしかしてタンポポ？」

「あたり。あなたがつんだ花よ」

さつきかごに入れた、タンポポやシロツメクサが天ぷらになっています。

よく野原で見かけるカラスノエンドウは、まめのぶぶんだけがソテーされています。パンとジュースも出てきました。

「いただきますーす」

ねねちゃんは、さっそくパンに手をのばし、ちぎって一口食べました。

「おいしい」

ほっぺが、ぽろんとおちてしまいそうです。

「これは、どんぐりパン」

「どんぐり！」

ねねちゃんは、おどろきました。どんぐりが食べられるなんて知らなかったのです。

「どんぐりをほしておいたものをこなにしておいて、きじにまぜているのよ。こうばしいでしょ」

ねねちゃんは、うなずきました。

「天ぷらも食べてみて」

タンポポの天ぷらを口に入れると、ころもがさくつと音を立てました。タンポポの

みが、天ぷらのあぶらでやわらいで、ほんのり口の中にひろがりました。

「おいしい」

タンポポが食べられるだけでもおどろきなのに、こんなにおいしいなんてさらにおどろきです。



「こっちはノビル？」

「そうよ。食べてみて」

ほくほくとしたはごたえで、いくらでも食べられそうです。

野の花が、こんなにおいしいなんて！

「今まで、ただの草だと思ってた」

「草にもおいしく食べられるものがあるのよ。どくがある草もあるから気をつけなくちゃいけないけどね。これはわたしのにわでとったものだからだいじょうぶ」

チャコさんはいいました。

ねねちゃんは、天ぷらを食べておえると、ジュースをのみました。あまらずっぱいあじがします。

「これはなあに？」

「これはうめジュース。六月ごろに、にわのうめの木になったみをこおらせておいて、ちよつとずつシロップにするの」

ねねちゃんは、ジュースをおかわりしました。

「おいしそうに食べてくれて、うれしいなあ。作ったかいがあるよ」

チャコさんは、ねねちゃんを見ながら、にこにこしています。

ねねちゃんは、おばあちゃんが作ってくれたつくだにを、はきだしてしまったことを思い出しました。

(おばあちゃん、がっかりしたかな。わるいことしちゃったな)

チャコさんは、おみやげに、とうめいなふくろに入ったクッキーをくれました。

「これは、どんぐりのクッキー。おばあちゃんと食べてね」

ねねちゃんは、おれいをいって、クッキーをうけとりました。

走って帰ると、おばあちゃんが、げんかんの前でいたりきたりしていました。

「おばあちゃん！」

ねねちゃんは、おばあちゃんにだきつきました。おばあちゃんは、ねねちゃんをぎゅつとだきしめました。

「しんぱいしていたのよ。どこにいったの。ちょっと前まで、おむかいのにわにいるのが見えていたのに、ちょっと目をはなしたすきにいなくなっちゃって」

ねねちゃんは、おばあちゃんにクッキーをわたしました。

「これ、もらったの。おばあちゃんと食べてって」

「もらったって、だれから？」

「むかいのカフェのチャコさん」

おばあちゃんは、首をかしげました。

「カフェ？ むかいで？」

「おばあちゃんに、いつもおせわになっていきますって」

おばあちゃんは「ああ」といいました。

なにか思いついたようです。

「それはきっと、むかいの空き家にすんでいるタヌキだわ。たまにくだものをあげているからね。あの子、カフェなんておしゃれな店をはじめたんだねえ。かんしん、かんしん」

「タヌキ？」

「そうタヌキ」

おばあちゃんが、当たり前のようにいったので、ねねちゃんはそれいじょうきくのをやめました。

「これが、ふきのとうだよ。ふきの赤ちゃん」

土の中から、きみどりいろのつぼみのようなものがかおをだしています。

おばあちゃんはしゃがんでふきのとうをとりはじめました。

「わたしも、手つだうよ」

ねねちゃんもしゃがみました。

顔を上げておむかいのほうを見ると、古い^{ふる}たてもものが目^めに入^{はい}りました。あのおしゃれなカフェは、見^みまちが良かったのでしょうか。

ねねちゃんとおばあちゃんは、おやつ^{じかん}の時間にクッキーを食^たべました。

「へえ、どんぐりのクッキーなの」

おばあちゃんは、目^めをまんまるにして、おどろいた声^{こえ}を出^だしました。

「どんぐりパンも食^たべたんだよ。どんぐりをほして、こなに^こにする^にたって」

ねねちゃんは、チャコさんにきいたことを、おばあちゃんに教^{おし}えてあげました。

「さっきは、いやがっているのにむりに食^たべさせようとしてごめんね。おばあちゃんも、こんど^ここういうのを作^{つく}ってみるよ」

どんぐりクッキーをほりほり食^たべながら、おばあちゃんがいきました。

「わたしも、つくだにをはきだしちゃってごめんなさい。せっかく作^{つく}ってくれたのに。こんど、ふきのとうのつくだにをいっしょに作^{つく}ってもいい？」

自分でさがしてとったふきのとうなら、食べられそうな気がします。

「もちろんだよ」

おばあちゃんは、うれしそうにわらいました。

まほうのおえかきペン

にしの 桃子

年にいちどの、たなばたの夜。

マイは、空のようすがきになって、ねるまえに、二かいのまどをガラリと開けました。

「あまのがわ、見えるかなあ」

いっぱいにくびをのぼして空を見上げると、おでこに、冷たいものがぽつんとあたりま
す。

「えーっ！ 雨?!」

マイの声が、夜のまちじゆうにひびきます。

空はなんと、星のひとつも見えないどころか、しとしと雨までふっていたのです。

「ちよっと、ごきんじよめいわくよ」

お母さんが、あわててまどをしめました。

マイは、かなしくってたまりません。おりひめさまとひこぼしさまは、空がはれていないと会えないのだと、ようちえんで聞いたのです。

「ざんねんだけれど、そろそろ、ねる時間よ」

お母さんに言われて、しぶしぶタオルケットにくるまったマイ。それでも、やっぱり空が気になって……。

すう……すう……すう……すう……。

となりから、お母さんのねいきが聞こえたのをたしかめて、マイはベッドからぬけだします。まどをもういちど開けると、さっきよりも、雨がはげしくなっていました。

マイは、両手を合わせて、おねがいをします。

「この雨がやんで、雲がぱーつとはれますように！」

そのときです。

シヤラララ……

どんよりした雲のすきまから、キラリと光るものが見えました。

「わあっ、ながれ星だ！」

そのまばゆい光は、マイめがけて、いっちょくせんにふってきます。

「えっ！ なに、なに?!」

マイがあわてているうちに、光るものはマイの家のにわにおち、ぱっとすがたをけしました。

マイは、むねのどきどきが止まりません。

「空から、なにかふってきた！」

そろりそろりとかいだんをおり、カサをさして、外に出たマイ。にわはすっかり、まっくらやみです。

「あった、これだあ」

マイは、にわの花だんに落ちていたものを、おそろおそろ、手に取ります。

「……星のかたちの、ペン？」

そのペンは、先が五つに分かれていて、それぞれ、ちがう色のキャップがついています。ぬれた手をパジャマでふいて、マイがためしに、黄色のキャップをはずして空にかか

げると……

シュツ！

あめふりの空に、黄色いながれ星が、えがかれたのです。

マイは、もうむちゆうで止まりません。カサなんて投げすてて、つぎは赤いペンを、空にむけます。

キュ、キュ！

ハートをかくと、夜空に、赤いハートがふわりとうかびます。

「このペン、もしかして……空におえかきできるってこと？」

「あっ、そうだ！」

マイはひらめいて、こんどは黒のペンをえらびます。

キュキュ、キュキュキュ！

こんどは、大しごとはじまりです。マイは、空にうかぶ雨ぐもを、黒くぬりつぶしていきました。



すると、ぬった先から、雨がやんでいったのです。

「わたしが、お天気をかえちやっただ！」

雲がすべてきえさったあと、さらにマイは、黄色いペンをつかって、たくさん星をかきました。

「よし、これで『あまのがわ』もできあがり」

はれわたった夜の空には、まばゆい星がかがやいています。

「おりひめさまとひこぼしさま、会えたかな」

マイは、いいことをしたきもちになって、うれしくってたまりません。

そのあとも、マイは空へのおえかきを、ねるのもわすれて楽しめます。

キュキュキュ！

「きれーい！」

赤と、黄色と、青をつかってかいたのは、大きな大きな花火です。夏まつりより先に、花火を見られるなんて。マイは、もっとおまつり気分になりたくなくて、どんどんペンを空におけます。



黄色いペンでかいたのは、チョコバナナ。

赤いペンで……りんごあめ！

白いペンで……ふわふわ、わたあめ。

「つぎはね、つぎはね……」

空には、マイの好きなものばかりがうかんでいきました。

「あーたのしかった！」

マイは、ぎゅっとペンをにぎって、うきうきしながら、かんがえます。

(明日、ようちえんにもっていこう！)

「マイちゃん、まほうつかいみたいだね！」って、みんなにおどろかれちゃうかも……)

マイは、明日の朝になるのが、まちきれなくなりました。

「そうだ！ このペンをつかえばいいんだ」

キュキュキュ、キュキュキュ！

マイは、はなうたをうたいながら、空を大きくぬりはじめます。えらんだのは、青いペ

ンです。

「お日さまも、かいちやえ」

キュツ、キュツ。

赤いペンでかいたお日さまが、まよなかに、かがやきはじめてしまいました。

「コケコッコー!!!」

とつぜんのにわとりのなき声に、マイはびっくり、こしをぬかします。おどろいたのは、マイだけではありません。

「も、もう、朝が来たの?!」

「いそいで、お弁当をつくらなくちや!」

開けたままの二かいのまどから、お母さんのあわてた声がします。

チリン、チリン!

外のみちでは、じてんしゃのベルがなりひびきます。あらわれたのは、しんぶんやささんです。

「すみません！ 朝あさになったのに、まだ、しんぶんができていないんです！」

チュン、チュン、チュン……

とりたちも、ねぼけたようすで空そらをとび、まちじゅうが、ざわざわとうごき出だしました。

「おかしいなあ、もう朝あさか？」

「ぜんぜん、ねられなかったわ……」

「いったい、何なにがおこっているんだ？」

（どうしよう！）

わたしが朝あさにしたせいで……

とんでもないことになっちゃった！

マイは、いそいでペンをにぎります。

キュキュキュ、キュキュ！

こんどは、黒いペンで、まっくらな空にかえたのです。

「あれ？ ゆめだったのね……」

お母さんが、ベッドにパタリとたおれていく音が、二かいから聞こえます。

しんぶんやさんも、頭をかきながら、お店へかえっていきました。

とりたちまで巣へもどると、まちは、しーん……と、しずまりかえっていきました。

マイは一人、にわでがたがたふるえます。

(もう、こんなペン、いらない！

もとのところに、かえさなきや！)

キュキュキュ、キュキュ。

マイは空におけて、白いペンで、長いはしごをかきました。

「たしかこのあたりから、ながれ星にのって、おちてきたんだよね」

よいしょ、よいしょ、よいしょ……

いっしょうけんめいはしごをのぼり、マイがたどりついたのは、空の上。

「すみませーん！ ペンを、かえしにきました！」

はしごにのったまま、マイは力ちからいっぱいさけびます。

「だれも、いるわけないかあ……」

マイがあきらめかけたとき、とおくから、声こえがしました。美しいうつくきものをきた女おんなの人ひとが、ゆっくりと、マイにあゆみよります。

「あなたが、ひろってくれたのですね」

つやつやとした長ながいかみのその人ひとを、マイは、絵本えほんで見たみことがあったのです。

「もしかして、おりひめさまですか？」

「はい、そのとおりでございます。あなたが、『空そらをはれにしてほしい』とおねがいしてくれた、マイちゃんですね」

「は、はい」

「わたくしが、このふしぎなペンをながれ星ほしにのせて、あなたの声こえのするもとへと、お届とどけしたのです」

マイは、星ほしのかたちのペンを見みつめます。まさか、おりひめさまが、マイに届とどけてくれ

たものだったなんて……。

「このペンは、だれかのために、強くおねがいできる人だけにあたえられる、特別なものなのですよ」

「でも……」

マイは、泣き出しそうになりながら、口をひらきます。

「わたし、かつてに、夜を、朝にかえちやっただんです！」

おりひめさまは、困ったかおで、マイを見つめます。

「そうですね。急にまぶしい朝になったのには、おどろきました」

おりひめさまに、しかられる！　マイが思った、そのときです。

「でも、あなたのおかげで、今年も空がはれて、ひこぼしさまに会えました。あなたのおえかきを、それはそれは、二人で楽しませてもらいましたよ」

おりひめさまのえがおを見て、マイのむねのおくまで、はれわたっていきました。

マイは、はしごをするするおりて、家へかえっていきました。

大きなあくびをしながら、たから箱のおくに、星のペンをしまえます。そう、マイは、ペンを返さないことにしたのです。

もう空にいたずらをしないように、おりひめさまと、ゆびきりげんまんのやくそくをして。

マイは、「あるとき」と、「あるとき」だけ、ペンを使ってもよいことになりました。

まずひとつめは、七月七日の、たなばたの夜。

おりひめさまと、ひこぼしさまが会えるように、空に出ている雲をけす、マイのだいじなやくめです。

もうひとつは、「だれかが、かなしいかおをしていた日の夜」。

マイは、黄色いペンをつかえます。

空におかっつて、シュツ！

ながれ星をひとつかいたなら、いそいでマイは、両手を合わせて、おねがいをします。

「明日^{あした}は、みんなえがおになりますように！」

きっと、かなうはずだね。

それは、マイだけがつかえる、とくべつなまほうです。

わたしもおねえちゃん

わしお ちえ

ほいくえんバスがみどり公園こうえんにとうちやく。

「先生せんせい、さようなら」

「あつ、ママー、ただいまー」

ママと手てをつないで、三人さんにんで家いえまで歩あるく。ママの右手みぎてがリコ、左手ひだりてがわたし。

「きょうね、ほいくえんでクツキーをやいたんだよ。はい、これママへのおみやげ」
家いえにつくなり、リコはほいくえんカバンからクツキーのふくろをとりだした。

「えっ、すごい！ これ、リコが作つくったの？ お花はなのかたち、かわいいね」

「ほら、ママ、早はやくたべて！ 早はやく！」

リコは、クツキーをママの手てにのせる。

「ありがとう。じゃあ、いただきます」



ママの顔かおから、にっこりがあふれている。

「うわっ、おいしーい！」

ママにぎゆうっとされて、リコもニコニコ。

わたしのクッキーは、まだカバンの中なか……。

「あっ、マコもクッキー、やいたんでしょ？ 見みせて、見みせて！」

ママはあわてて、わたしにも声こえをかける。

「リコのおんなじやつだから、もういい」

わたしは、ちよっとすねてこたえる。

「ママは、マコのクッキーもたべたいな」

わたしは、しぶしぶクッキーをとり出す。

わたしとリコは、ふたご。リコの五分後ごぶんごにわたしが生うまれた。わたしたちは、今いま、ほい

くえん年長ねんちやうのゆり組ぐみさんだ。

今日きょうはほいくえんで、そつえんいわいのクッキー作つくりをした。そこで家いえの人ひとへのおみや

げも、もらったんだ。

二人ふたりのふくはいつもおそろい。ふくだけじゃなくて、ぼうしも、かばんもみんな。耳みみの

下でそろえたショートヘアもおんなじ。せのたかさも、たいじゅうも、ほとんどいっしょ。だからわたしたちは、いつもまちがわれる。

「あれっ！ どうしよう」

れいぞうこをのぞいていたママが、とつぜん大きな声をあげた。

「ママ、どうしたの？」

わたしたちは、そろって声をあげた。二人のいうことが、ぴったりかさなっちゃうことがよくある。やっぱりふたごだからね。

「ぎゅうにゆうが、少ししかないの。クリームシチューを作ろうと思っただけ、こまったなあ」

「ママ、リコたちが、かってきてあげるよ」

「えっ、ほんと？ 二人でおつかいできる？」

ママは、リコとわたしのをおをじゅんにじいっと見てから、にっこりわらっていった。

「じゃあ、オクダマーケットまで、二人で行ってきてくれる？」

「うん、オクダならだいじょうぶだよ。ねっ、マコ」

「う、うん」

わたしは、少しつまりながらこたえる。

『また』だ。なんでもリコがかってにきめて、さきにこたえちゃう。

オクダは、ほいくえんバスのとまるみどり公園のよこにある。みちはしっているけれど、二人だけでおみせに入ったことはない。だいじょうぶかなあ。

「じゃあ、ぎゆうにゆう一本、かってきてね」

ママは、百円玉を三まい、おさいふに入れて、リコのくびにかけた。

「ママ、まかせて。ねっ、マコ」

リコは、くびから下げたさいふをもって、とくいそうにいう。

オクダにつくと、たなの中なかにいろんなぎゆうにゆうがならんでいた。

「マコ、これだよね」

リコは、わたしのへんじもきかずに、青色あおいろのぎゆうにゆうをとって、さっさとレジにすすんでいく。あわててそのあとにつづく。

「二百二十円にひゃくにじゅうえんです。あら、ふたごちゃん？ おそろいのふく、かわいいね。どっちがおねえちゃん？」

ああ、『また』だ。はじめてあった人は、かならず『どっちが、おねえちゃん？』って聞くんだよね。

「わたしが、おねえちゃんです」

リコは、さいふから百円玉を三つ出して、ほこらしげにいう。わたしは、そのとなりで、だまって立っているだけ。

「そう、しっかりもののおねえさんね。はい、八十円のおつり。おねえちゃん、おつりをおとさないようにね。ぎゅうにゆう、ちよつとおもいよ。もてる？」

「はい、だいじょうぶです」

リコは、はきはきとこたえる。

ママは『ふたごだから、おねえちゃんもいもうともないわよ』というけど、ほかの人は、どっちがおねえちゃんかが、しりたいみたい。たった五分しかちがわないのに。

どうしてみなは、『どっちが、おねえちゃん？』と聞くのに、『どっちが、いもうと？』とは聞かないの？ 『リコちゃんとマコちゃん』といって、『マコちゃんとリコちゃん』とはいわないの？ ママだっていつも『リコとマコ』っていう。へんだよねえ。

リコがおさいふをもって、わたしがおもいぎゅうにゆうをもってかえった。

ばんごはんのクリームシチューは、とてもおいしかった。

「ママ、見て、見て。……どう？」

とどいたばかりの水色のランドセルをせおって、大はしやぎをしているのは、リコ。

「よくあってるよ。マコもせおってごらん」

ママにいわれて、わたしもランドセルをせおってみる。なんだかウキウキしてとびはねたくなるけど、わたしはとんだりしない。

二人のランドセルは、もちろんおそろい。

「早く、小学校に行きたいなあ」

リコはかがみの前でくるくるまわっている。

「こんどの一年生は人数が少なくて、一クラスなんだって。だからリコとマコは、またおなじクラスだよ」

ママのことばに、リコが手をたたく。

「やったあ！ マコ、よかったね」

「う、うん」

ちよつと、つまりながらへんじをする。

わたしたちは、生まれたときからずつといっしょ。ほいくえんでも、家でも、一日中。

一年生になったら、リコとはちがうクラスになる。はじめてべつべつのへやです。すす。少しだけたのしみだったんだけどなあ。

四月になって、一年一組がはじまった。

「うわあ、おんなじ顔や。どっちがリコちゃん？ どっちがマコちゃん？」

あたらしく友だちになった子たちは、わたしたちをじろじろ見ながらいう。

「どうやって見分けたらいいのかな？」

先生まで、わたしたちに聞いてくる。

「あつまるとき、いちばん前にいる子がリコ、うしろのほうにるのが、マコだよ」

「いつもおしゃべりしている子がリコ、だまっている子が、マコだよ」

ほいくえんからいっしょのみっちゃんや、ゆうくんが、みんなに教えてくれている。

「そういわれても、さっぱりわからないなあ」

みんな、わたしたちをかわるがわる見て、いつまでもガヤガヤさわいでいる。

イヤだ、イヤだ！ やっぱりちがうクラスだったら、よかったのに。

つぎの朝、わたしはお気に入りのピンクのシャツをきた。リビングに行くと、リコも同じシャツをきていた。

「あっ」

わたしはいそいでへやにもどって、ベージュのTシャツにきがえた。

「あれ？ マコ、ピンクじゃないの？」

ママがわたしをみて、へんな顔をしている。

「うん」

「きょうは、きねんしゃしんの日だけど、おきに入りのピンクじゃなくていいの？」

「うん、だいじょうぶ。これでいい」

もうおそろいはイヤなんだ。

「えっ！ せっかくおねのRとMのインシャルがそろっているやつなのに、なんでえ？」

リコも、ふまんそうにいう。

「きょうは、こつちがいいから」

二人のふくは、きほん、みんなおそろいだ。だからきょうからは、リコとかぶらないよ

うに、わたしがずらすことにした。

「マコ、運動場にあそびに行こ」

二十分にじゅうぶんきゆうけいのとき、リコがさそいにきたけど、わたしはしらんぷりをした。きよ
うは、あたらしく友だちともになったちかちゃんとあそびたかつたから。

ちかちゃんはせきがとなりで、一年生いちねんせいになってはじめて話はなした子こだ。てつぼういちりんしゃや一輪車
がとくいで、なんかかつこいい。

わたしがちかちゃんこえに声をかけようとしたとき、リコがさきにちかちゃんををさそって、
外そとにあそびに行いってしまった。

ひとりぼっちになったわたしは、教室きょうしつで本ほんを読よんだ。まどの外そとから、運動場うんどうじょうのキャー
キャーこえという声こえが、聞きこえてくる。

本ほんのお話はなしなんて、ちつとも頭あたまに入はいってこない。先生せんせいは教室きょうしつでノートのまるつけをしてい
ていそがしそう。二十分にじゅうぶんは、あそんでいるとすぐにおわっちゃうけど、教室きょうしつにいると長ながい。

「せんせい！ リコちゃんが、おちた！」

ちかちゃんが、まっ青な顔で教室にとびこんできた。先生は、あわてて外へとび出して行った。わたしはドキッとしたけれど、見に行かなかった。

先生は、なかなか帰ってこない。

ピーポー、ピーポー

しばらくすると、きゆうきゆう車のサイレンが、聞こえてきた。まどから運動場をのぞいたけれど、人がいっぱいよく見えない。ドクン、ドクン、と大きくむねがなる。しんぞうが、体の外にとびだしてしまいそう。

たまらなくなつて運動場にかけ出した。でも人がいっばいで、リコのところに行けない。リコ、どこ？ どこにいるの？

「子どもたちは、教室にもどりなさい」

ほかの先生が、あつまっている子どもたちを、へやにかえらせている。わたしもしかたなく教室にもどつた。

先生もちかちゃんも、まだもどってこない。

教室はざわざわしている。まわりで見ていた子の話によると、どうやらリコはジャンブルジムのてっぺんからおちたらしい。



(リコ、だいじょうぶだよね。しらんぷりしてごめん。いっしょにいらなくてごめん) 三時間目のはじまりのチャイムがなっても、たんになの先生は、なかなかかえってこなかった。ちがう先生がきて、しばらくしずかに本を読んでいるようにいって、その先生もまた、どこかへ行ってしまった。

ピーポー、ピーポー

きゆうきゆう車のしゅっぱつするサイレンが聞こえてきた。それからしばらくして、先生が教室にもどってきた。

「リコさんは、ジャングルジムからおちてけがをして、びょういんに行きました」

先生はみんなにそういったあと、わたしのそばにきて、そつとささやいた。

「リコちゃんのこと、しんぱいだと思うけど、だいじょうぶだよ。マコちゃんは、お父さんがむかえにきてくれるから、まっついてね」

リコ、ごめんね。わたしがいっしょに行かなかったから、けがしちゃったんだよね。リコ、しんじやったりしないよね。リコ、いじわるをいって、ほんとうにごめん。

頭の中は、リコのことदैいっばい。そのあとのことは、ぜんぜんおぼえていない。

四時間目がおわるころになって、やっとパパが車でむかえにきてくれた。

「マコ、だいじょうぶだよ」

パパは、わたしをぎゅっとだきしめてくれた。パパといっしょにリコのびょういんにむかう。ママはかいしゃから、そのままびょういんとんでいったそうさだ。

車の中では、わたしもパパもなにもしゃべらなかつた。やっとびょういんについた。リコのびょういつのとびらをそつとあける。

「あつ、マコ！ あいたかつたよう」

リコのげんきな声がとんできた。右手は、ほうたいでぐるぐるまきで、頭も白いネットのぼうしをかぶっている。

リコの顔を見ると、はなのおくがあつくなつて、なみだが出てきた。

「リコ、いたい？」

「そりゃ、いたかつたよう」

リコもなみだ目になつている。

「リコ、ごめん。いっしょに行かなくて」

「うん、マコがいなかつたから、ちよつとこころぼそかつた」

「右手はこっせつしているの、しばらくギプスだって。頭は、いろいろけんさをしたけれど、だいじょうぶだって。でもねんのため、きょうはにゆういんすることになったの」
ママが、パパにせつめいしている。

「リコ、たいへんだったな」

パパが、リコのかたに手をおいていう。

「リコちゃん、おくすりですよ。あつ、うわさのふたごのきょうだいさんね。リコちゃん、よかったね、おねえちゃんがきてくれて」

へやに入ってきたかんごしさんが、わたしを見て、リコにいう。

「あつ、わたしはいもうとです。リコがおねえちゃんです」

わたしは、小さな声でかんごしさんにいう。

かんごしさんは、リコと顔を見合わせて、ウフフとわらいながら、つづけていう。

「いもうとだけど、やさしくてしっかりもののおねえちゃんのマコさんね」

ぽかんとしているわたしを見て、かんごしのおねえさんは、リコにウインクをしている。

「さつき、リコちゃんからマコちゃんのこと、いろいろ教えてもらったんだよねー」

「えっ！ リコ、なにをいったの？ もう！」

リコを見ると、にまにまわらっている。

「そうなんですよ。この子たちはふたごなので、どっちもおねえちゃん、どっちもいもうとなんですよ」

ママも、やさしいえがおでいう。

「リコは右手がつかえないから、あしたからは、わたしがリコにもつをもってあげるね」

「えっ！ やったあ！ マコ、大すき！」

「おっ、マコ、おねえちゃんみたいでかっこいいなあ」

「リコ、よかったわね。マコがいっしょで」

パパとママが、にっこりわらう。

わたしも、にっこりわらう。

リコも、にっこりわらう。

わらっている二人の顔は、そっくり。

あかり

こんどう みえこ

ある町に、シャッター通りと呼ばれる商店街がありました。すでに閉店して、シャッターがおりたままの店が多く、いつからか、そう呼ばれているのでした。その通りの片すみに、小さな手芸店があります。この通りでいちばん古い店です。店の入り口の上には『鈴木手芸店』という古びた看板が、かかげられ、店の前にはのぼり旗が立っています。閉店セール（へいてん）の赤い旗（あか）です。その赤い旗は雨風にさらされ、すっかりうすよごれていました。それは、ある事情で、店主のおじいさんが、閉店セールを始めたものの、いつまでたっても、店を閉めずにいるからでした。閉店セールを始めたころは、商店街近くの公園の桜が咲いていました。けれど、今は、冷たい秋風がシャッター通りをふきぬけているのです。そんなある日のこと。シャッター通りの外灯の明かりがつき始めたころ、鈴木手芸店にお客はだれもおらず、店の奥で、店主のおじいさんが、ひとりで夕かんを讀んでいまし

た。

夕かんを読み終えると、おじいさんは、いつものように店をしめるために、シャッターを下ろしに外へ出て行きました。すると、手芸店のショーウィンドーを、親子連れらしい二人が、のぞきこんでいたのです。小学生くらいの女の子と、そのお父さんのようです。おそろいの茶色のベレー帽をかぶり、茶色のマントを着ていました。そして、その女の子ががっかりしたように、

「お父ちゃん、まだマフラーやセーターは飾ってないんだね。この服、寒そうだねえ」と、言いました。そう言うのも、もっともでした。店のショーウィンドーには、季節はずれの春らしいピンクのワンピースが飾られたままなのです。まるで、この店だけが時間が止まってしまったかのようです。

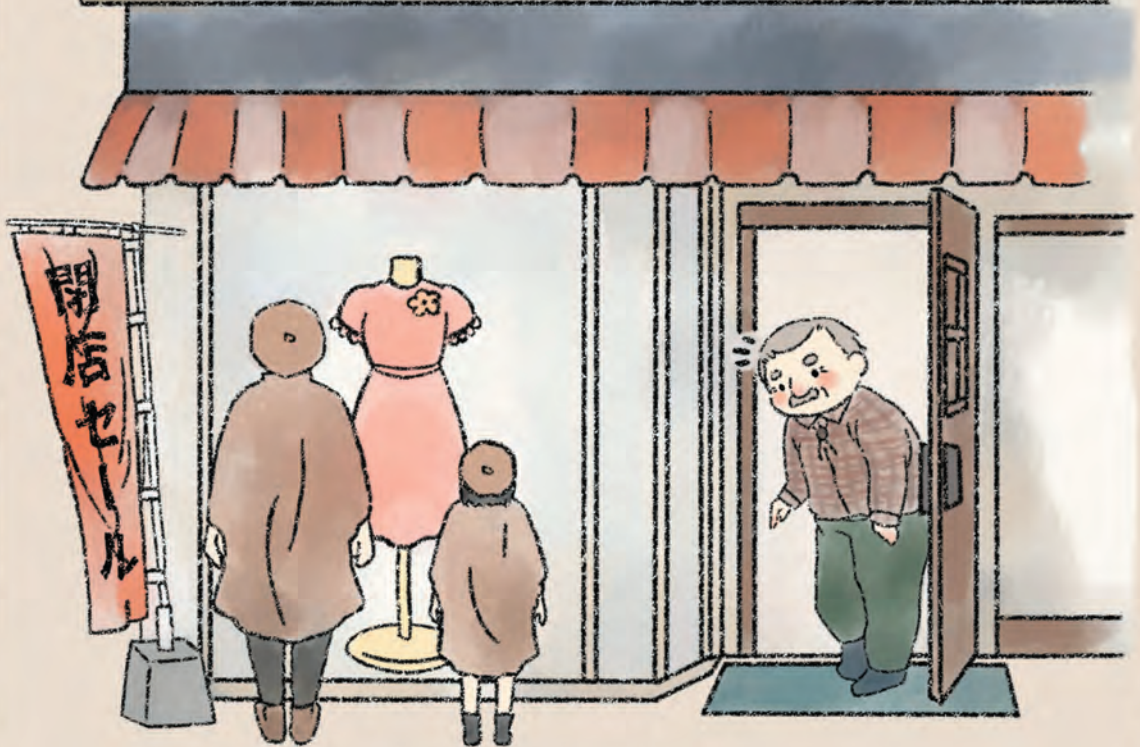
女の子の話を聞いた店主のおじいさんは、申しわけなさそうに言いました。

「ごめんなさいね。今年はまだ、何も編んでなくて。元気がわかなくてね……」

女の子は、まん丸い目で、店主のおじいさんを見つめてから、こう言ったのです。

「うちのおばあちゃんも、ずっとしよんぼりしているの。おじいちゃんが急に死んじゃったから。でも、編み物が好きだから、毛糸を手にしたら、きっと、明るくなると思うの。」

鈴木手芸店



それでね、ふだんは着ない服を着て、朝早くに家を出て来たの。この店は、おばあちゃんのお気に入りになんだよ。ね、お父ちゃん？」

女の子のお父さんは、小さくうなずいてから、少し声を落として、こう言いました。

「つい最近、この子のおじいちゃんが病気で亡くなりました。今まで元気だったおばあちゃん、ちっとも出かけないんです。お気に入りのこの店にも、今年は、おばあちゃんが来るのは難しそうですねですよ」

「ああ、そうでしたか……それはお気の毒に」

と言ったおじいさんの声もしずんでいました。

それは他人事ではなかったからです。店主のおじいさんも、半年ほど前に奥さんを亡くしていました。店の閉店セールを始めて間もなくの事でした。とつぜん、奥さんが心臓発作で倒れて、亡くなってしまったのです。それで、おじいさんの心の時計は止まってしまった様に、店じまいする事も、前のように元気に店を続ける気力もわかないのでした。

親子から事情を聞いたおじいさんは、二人を店の中に招き入れました。すると、すぐに女の子は歓声をあげました。入り口近くのワゴンに、毛糸が山積みになっていたからです。

「お父ちゃん、これだけあれば、おばあちゃんだけじゃなくて、山のあかり商店街のお客

さんにも、いっぱい買ってもらえるね」

と、女の子がうれしそうに言ったので、店主のおじいさんは首をかしげました。それから、お父さんも、みょうな事を言ったのでした。

「実は、今日、ここへ来たのは、毛糸を買うためではないんです。売れ残っている品を、別の場所で売ってほしくて来たんです」

おじいさんは、目をしばしばさせました。

女の子のお父さんは、少し長い話になると、前置きしてから、くわしく話し始めました。

「わたしの家族は山奥で暮らしているので、山のふもとの町へ行くのも大変なんです。友達の家や知り合いも同じです。それで、みんな考えて、今年の夏ごろから、山の中に小さな商店街を作り始めたんです」

おじいさんは感心したようにうなずいて、話のつづきを聞きました。

「一番の悩みは、山奥の商店街に来てくれる店を探すことでした。ちようど、そのころ、山のふもとの町や村で、お客が少なくなり、商売を続けられない店が結構あるという話を聞いたんです。それなら、そんな事情で閉店を決めた店主たちに声をかけてみようという事になったんです。そうしたらね……」

女の子のお父さんは、女の子と顔を合わせ、にっこりしてから、こう続けました。

「商売が好きな店主は、山奥でも、お客が次つぎにやって来るとわかると、喜んでくれて、色んな店が並びました。でも手芸店はまだ一軒もありません。私達の暮らす山奥は、最近、とても寒くなり、山のあかり商店街のお客さん達は、雪が降りだす前に、毛糸やコートの裏地などを買って、冬に備えたいんです」

お父さんの話がひと息つくくと、さっきから話したがっていた女の子が、こう言いました。「それでね、友だちのかーすけ君が、町から山に遊びに来た時、この手芸店が、閉店セー
ル中だよって、教えてくれたの！」

「かーすけ君？」

おじいさんが、変わった名前だと思っ
て聞き返すと、女の子はにっこりして、うなずきました。お父さんは話を再び続けました。

「そういうわけで、ぜひ、山のあかり商店街に来て、残りの品を売ってもらえませんか？」と、お父さんは真剣な表情でたのみ、女の子は愛くるしい丸い目でみつめて、よい返事を待っているようでした。おじいさんは、すまなさそうに言いました。

「しかし、もう年なので、山奥まで行って、店を開くなんて、無理じゃないかと……」

そう言いつてうつつおいているおおじいいさんに、おお父とうさんは、明あるい声こえでい言いました。

「それはご心配しんぱいいりません。山やまのああかりしやうてんがい商店街は、この店みせから楽々らくらくと行いけますから。今いまから、その準備じゆんびをしますので、少すこしだけ、手て伝だつてください。ままずは、ああそこに、山やまのああかりしやうてんがい商店街ののれんをかかけさせてもらいますね」

とい言いつて、レレジの後うしろの部へ屋やを指さしたのです。その部へ屋には、事じ務む机つや商しやう品ひんの入はいつた段だんボボールが重かさねて置おかれていました。おおじいいさんが、ききよとんとしていると、女おんなの子こが、おお父とうさんのカカババンから、のれんを一ひとつとり出しました。それを部へ屋の入いり口に、おお父とうさんが、ううやうやしくかけたのです。のれんは濃こい青色あおいろで、真まん中に黄きいろ色いろい花つぼみが描えがかれていました。そのつつぼみは、ふふっくらして、今いまにも開ひらきそうです。女おんなの子こは、黄きいろ色いろい花を指さして、ふふしぎな事を言つたのです。

「この花はなはママツヨイグサつていうの。一ひとと晩だけ咲さく花。山やまのああかりしやうてんがい商店街の店みせが開くのは、この花はなが咲いている夜よるの間だけなのよ」

それから、おおじいいさんは、ととまどいながらも、女おんなの子このおお父とうさんに言いわれた通りに、店みせのシャシャツターをおおろし、家いえ中ちゆうのとじまりもしました。親おや子こふたりは、ワワゴンの毛けい系とを、かからくさ模様もようのふろしきに包つつみました。三さん十じゅう個こほどの毛けい系とはみんな入はいりました。そのふろし

きは、包んだ品の大きさに応じて、のび縮みできる特別なふろしきでした。そして最後に家中の明かりが消されると、お父さんが、のれんに向かって、力強く、こう唱えたのです。

「つなぐれ、つなぐれ、山のあかり商店街へ」

すると、とつぜん、レジの後ろの部屋から、冷たい風がひゅーっとふいて、のれんが風でゆれました。それだけではありません。のれんに描かれた黄色いマツヨイグサのつぼみが、ゆっくりと花開き、ほのかに光ったのです。

おじいさんは、びっくりして、立ちすくんでいましたが、ふろしき包みを背負ったお父さんは、「ついて来てくださいね」と言って、最初にのれんをくぐり、そのあと、女の子も「くつをはいたままで来てね」と言って、のれんをくぐって行きました。最後にひとり残ったおじいさんが、勇気を出してのれんをくぐりますと、そこは、いつもの部屋ではありませんでした。土と草のにおいがして、暗い湿ったトンネルの中を歩いているようでした。

お父さんや女の子の姿は見えませんでした。暗やみに目が慣れたころ、明かりが一つ見えました。よく見ると、のれんに描かれた黄色いマツヨイグサがほのかに光っています。のれんが風にゆれています。

(ああ、あそこが出口じゃないだろうか……)

そう思つて、そこまで行つて、のれんをくぐると、そこは山の中だったので。森の中に月の光が降り注いでいました。ふり返ると、のれんは、大きな神々しい木の穴の前にかげられ、根元には黄色いマツヨイグサがたくさん咲いていました。そして、その木の後ろから、二匹のタヌキが顔をのぞかせたのです。

小さなタヌキは、すまなさそうに、おじいさんに言いました。

「お父ちゃんに言われたの。こっちに帰るまで、人間じゃない事を話しちゃいけないって」
父さんダヌキも、おじいさんに、おわびとお礼を言った後、くわしく話してくれました。

「店にかけてきたのれんは、この木の穴にかけてのれんと同じものです。この大きな木は、山の神様のお休みどころと言われ、特別な力を宿しているんです。その力のおかげで、特別なトンネルを通り、ここへ来られます」

おじいさんは、おどろきながらも、うなずいて聞いていました。それから、父さんダヌキは、おすめのタヌキに言いました。

「父ちゃんは先に新しい店に行つてるよ。手芸店の開店の準備をしなくちゃ。だから、おまえは、おじいさんに、他の店を見せてあげながら、新しい店に来なさいね」

と言いって、ふろしき包づつみを背せ負おったまま、あつという間まにかけ去さって行まきました。

それで、その先さきは、タヌキの女おんなの子ことおじいさんの二人ふたりで、なだらかな山道やまみちを登のぼって進すすみました。道みちの両りょうわきにはマツヨイグサが所々ところどころに咲さいています。山やまのあかり商店街しょうてんがいの外がいと
うのようです。月つきに照てらされた黄色きいろい花はなは、のれんの花はなと同じ様ように、ほのかに光ひかって、
二人ふたりの足元あしもとを照てらしていました。

最初さいしょに見みえてきた店みせは、洋服ようふくの仕立屋したてやでした。店みせのドアが半分はんぶん開あいていたので、中なかを
そつとのぞくことができました。大人おとなのタヌキが大きなお腹なかまわりを、白髪交しらがまじりの店主てんしゅ
に測はかってもらっています。緊張きんちようしているタヌキに、店主てんしゅはにこやかに話はなしかけていました。

その先さきには、くつ屋やがありました。店みせの前に、くつがずらりと並ならんでいます。イノシシ
の子こが赤あかい運動うんどうぐつをはくのを、店主てんしゅの女性じよせいが手伝てつだっていました。それを心配しんぱいそうに、イ
ノシシのお母かあさんがそばで見みていました。

くつ屋やを通とおりすぎると、曲まがりくねった道みちにそって、洋服屋ようふくや、文房具屋ぶんぼうぐや、古本屋ふるほんや、
駄菓子屋だがしや、お茶屋ちややと続つづきました。どの店みせも、山やまの動物どうぶつたちが買かい物ものを楽たのしんでいました。

お茶屋ちややのそばには、お休やすみどころもありました。

キツネの夫婦ふうふうがお茶ちやを飲のんでいたたり、クマの親子おやこがいっしょに絵本えほんを見みていたたり、ウサ

ギの子ども達が、駄菓子屋で買ったコマで遊んでいました。おじいさんは、そんな様子を
見て、あたたかい気持ちになっていました。

さらに先に進みますと、ある店の前で、父さんダヌキが、お客さんたちを並ばせている
のが見えてきました。

「あの店、おじいさんの手芸店よ。人気だね」

と、タヌキの女の子はうれしそうに言いました。おじいさんが、その店に近づくと、父
さんダヌキが、大きな声で言いました。

「みなさん、鈴木手芸店の鈴木さんが来てくれましたので、店を開けますね」

と言うやいなや、ネズミの母親が五つ子を連れて、おじいさんよりも先に、足元を走り
ぬけて店に入りました。その後ろには、双子のリスの姉妹、キジの夫婦、キツネの親子、
イノシシの奥さんが、次々に店に入りました。

そんなお客さん達で、店は大にぎわいです。

（わたしの店に、こんなにたくさんのお客さんが、喜んで来てくれるなんて、夢のようだ）
おじいさんは、心の底から、わくわくしてきました。

店のゆかは土間でしたが、真ん中には四角い大きな木のテーブルがあり、その上に毛糸

の入った竹かごが三つ、置いてあるのです。

どの客も、毛糸と引き換えに、山ブドウやクリやキノコなどの食べ物や物を渡したり、小さな木製の手作りのタンスや、きれいな色の石、モミジの便せんなどを渡していきました。

そして、またたく間に、三十個ほどの毛糸は全部売り切れたのです。

その後でした。上品そうなタヌキのおばあちゃんが、つえをついて、店にやって来たのです。タヌキの女の子のおばあちゃんでした。おばあちゃんタヌキは、毛糸がひとつもないテーブルを見て、

「ちよっと、来るのがおそすぎましたね。またお店を開けてくださると、うれしいわ」

と、おばあちゃんタヌキはにっこりして、おじいさんに言いました。と、その時、フクロウの鳴き声が聞こえたのです。それを聞いた父さんタヌキが、あわてだしました。

「おじいさん、急いで、もどりましょう。夜明け前に、のれんをくぐらないと、向こうの店に、もどれなくなりますから」

おじいさんは、おばあちゃんタヌキに、別れのあいさつをすませ、タヌキの親子といっしよに、大きな木の所へもどって行きました。

その途中、父さんタヌキが言いました。

「実は、山のあかり商店街にまた来るには、守ってもらいたい約束が二つあるんです」
おじいさんが、うなずきながら聞いた約束の一つ目は、山のあかり商店街の事を、だれにも話さない事でした。もう一つは、向こうの店を開けて、商売をしない事でした。

「この約束が守れないと、のれんをかけて呪文を唱えても、もう二度と来られませんか」と、父さんダヌキが言うと、さみしそうに、女の子のタヌキが、こうつけ加えました。

店主が『また来ます』って言ったのに、急に来なくなって、終わった店も多いから」

おじいさんは根がまじめでしたから、この時は、そんなに難しい事に思えませんでした。やがて大木の所までもどると、父さんダヌキが、新しいのれんと、特別なふろしき包みをおじいさんに渡して、こうさげびました。

「つなぐれ、つなぐれ、鈴木手芸店へ！」

今度は、おじいさんだけでもどって行きました。やはり、少し遠くに明かりが見えます。店の奥の部屋にかけたのれんの黄色い花の明かりです。そののれんをくぐりぬけると、ちゃんと、店のレジの前に出たのでした。けれど、店の奥の部屋の入り口にかけたのれんを、もう一度よく見ると、マツヨイグサは、かれてしまった様に、もう光っていませんでした。

その次の日から、おじいさんは、鈴木手芸店の灰色のシャツターに、臨時休業のお知らせの紙を張りました。それから、月夜になると、父さんダヌキに渡されたのれんをかけ、教えてもらった呪文を唱え、山のあかり商店街に足を運びました。山のお客さんから、コートが欲しいと言われれば、色とりどりのビロードの生地を持って行きました。鈴木手芸店は、山のお客さん達の間で、親切な接客をしてくれる店と、大評判になりました。それから、店のまん中のテーブルで編み物教室も始めました。先生は、おばあちゃんダヌキです。おじいさんが、おばあちゃんダヌキにお願いしたのです。その教室には、カモシカのお嬢さんやウサギの奥さん、ネズミの若いお母さん、キツネのおばあさんも来ました。

タヌキの女の子はうれしそうに言いました。

「おばあちゃん、このごろ、明るくなったの」

それからしばらくして、父さんダヌキがこんな事を、おじいさんに話してくれたのです。「鈴木手芸店のおかげで、お客さん達は、今年の冬支度が十分できました。もうすぐ、山に雪が降り始めます。そうしたら、お客さんも来なくなります。鈴木さんも、もう向こうの店にもどらず、こっちで暮らしませんか。温泉付きの小さな家を用意しますから」

おじいさんは、山のお客さん達と仲良くなっていたので、この話をうれしく思いました。その数日後の夕暮れ時でした。おじいさんは、山のあかり商店街に行き始めてから、買い物などの用事がある時は、少し暗くなってから出かけていました。常連のお客さんや知り合いにはったり会わないようにしていたのです。ところが、店の裏口から外へ出ると、店の臨時休業の張り紙をじっと見ている少女と出くわしてしまったのです。少女はおじいさんに気がつくのと、すぐにかけ寄ってきて、

「あの……お店、もう開けないんですか？」

と、聞かれたのです。おじいさんが返事に困っていると、少女は、しつかりした口調で、店に来た理由を話してくれました。少女は、少し前に、遠くの大きな町から、少女のお母さんが子どもたちのところに暮らした町へ、お母さんと二人で、もどって来たとの事でした。

「あたしのお母さんが言っていたんです。この店は、子どもたちから、あたしのおばあちゃんによく来ていたって。秋になると、毛糸を買って、おばあちゃんに編み物を教わったよって。それで、あたしも、そうしようと思っていいたら、急に、お店が休みになったから」

その少女と話した後、おじいさんは、買い物から帰ると、のれんをくぐり、山のあかり

商店街へ行きました。向こうへ着くと、タヌキの女の子が、とてもはしゃいでいました。「お父ちゃんがね、雪がふって、山が白いぼうしをかぶる前に、おじいさんに、こっちへ、引っこして来てもらおうって」

その夜は、おばあちゃんダヌキが編み物を教えに来ていて、暗い表情のおじいさんに、何か心配事でもあるのかと聞いてくれました。

おじいさんは、おばあちゃんダヌキにだけ、小声で、正直に胸のうちを明かしました。向こうの店に、とつぜん、女の子がやってきて、「店をもう開けないのか？」と聞かれて、気持ちが悪れたと話しました。おばあちゃんダヌキは、だまって聞き終わると、

「あたしは、この手芸店のおかげで、すっかり元気になったのよ。編み物教室の先生になって、今も、だれかに必要とされているんだと思えましたしね。あのマツヨイグサの明かりのように、ここに、明かりがもったのよ」

と言って、胸に手を当てました。おじいさんは、深くうなずきました。

「私も、山のあかり商店街に来て、私の心の明かりがまたとまりました。そんな時、その女の子の話を聞いて、気づいたんです。長く続けてきた店なので、向こうのお客さんにとって、大事な思い出の店になっていた事に」



おばあちゃんダヌキは小さくうなずき、

「鈴木さんが、もし、向こうで、再出発するなら、あたしは応援しますよ」

と、言つて、自分の編んだ白いマフラーを、鈴木さんの首にかけてくれました。そして、

「これからも、編み物教室の先生は続けるわ」

と言いながら、手をふつて帰って行きました。

次の日の晩は月夜でした。けれど、おじいさんは、山のあかり商店街へ行きませんでした。おばあちゃんダヌキにもらった白いマフラーを首にまき、店の外から月を見上げて、タヌキの親子に心の中でつぶやきました。

（ごめんね。そして、ありがとう。ここで、もう一度、店の明かりを、ともしていくよ）

それから一カ月がたちました。店の前には、再オープンののぼり旗が立って、ショーウインドーには、おじいさんの編んだ赤いマフラーと白いセーターが飾られました。そして、再オープンした日に、あの時の少女が、お母さんと毛糸を買いにやってきたのでした。

おばあちゃんのハレの日ごはん

ふじのたかみ

やっと秋あきらしくなった金曜日きんようびの放課後ほうかご、

「カオリちゃん、明日あすの土曜日どようび、うちで一緒いっしょに宿題しゅくだいしようよ」

となりのクラスクラスのサキちゃんが、うれしそうに話はなしかけてきた。

小学五年生しょうごねんせいの私わたしたちは、幼稚園ようちえんの時ときからずっと仲良なかよしの幼おきななじみだ。

三年生頃さんねんせいごろまでは毎日遊あそんでいたのに、サキちゃんの習ならい事ことが増えて、今いまは学校がっこうで会あうだけになってしまっている。

「明日あしたはね、うちのお父さんとうとお母さんかあが結婚式けっこんしきに招待しょうたいされて、私わたしはお留守番るすばんなんだあ。

だから、カオリちゃんが良よければ、お昼ひるご飯はんを食たべに来てもらったらどう？ って、おば

あちゃんの提案ていあん。

ねえ、カオリちゃん来てくれる？」

「えーっ、うれしい、行きたい。帰ったらすぐ、お母さんに聞いて返事する」
「わかった。じゃ、私これからスイミングに行くから、メールで返事してね」
サキちゃんはその言いながら、バイバイと手を振って教室から出て行った。
学校から帰って、お母さんに明日の事を話すと、

「サキちゃんのおばあちゃん、元気で過ごしのね。カオリたちが幼稚園の頃を思い出すわ。」

せっかくのお誘いだし、行ってらっしゃい」
サキちゃんのおばあちゃんは、私たちが幼稚園の頃、行事があるたびに、お母さん代わりに来ていたので、うちのお母さんとも顔見知りだ。

私は、お母さんのタブレットを借りて、サキちゃんに（明日行けるよ）とメールした。
次の日の朝、バッグに宿題のプリントと漢字ドリルを入れて出かけようとするど、

「これ、オヤツに持って行ってね」

お母さんはそう言って、かわいい袋に入ったクッキーを差し出した。

「サキちゃんもおばあちゃんも食物アレルギーが無いって、前に聞いていたから、ゆうべ作ったのよ」

お母さんは栄養士なので、いつもは食べる事に関して、いろいろとうるさいのだけど、こんな気づかいは素直にうれしい。

「ありがとうございます。じゃ、行ってきます」

サキちゃんの家は歩いて十五分くらいだ。

「おじやましまーす」

私は久しぶりに家上がり、まずは宿題と言いたいところだが、二人でおしゃべりが止まらない。

最近のマンガやアニメ、お気に入りのグッズや洋服の話など、しゃべっていると、あつという間にお昼の時間が近づいた。

あわてて宿題を始めて半分終わった頃、ドアが少し開いて、おばあちゃんが顔を出した。

「まあ、カオリちゃんいらっしやい。今日は来てくれてありがとうね。」

もうすぐお昼ご飯だから、二人とも手を洗っておいで」

「はい」

私たちは返事をして、廊下に出ると、だし汁の良においがしている。

サキちゃんのおばあちゃんが作ってくれたのは、親子丼とカワイイ花形の麩が入った吸

い物だった。

他には、みずみずしい梨とブドウ、その横にはこげ茶色で、形が不ぞろいの豆のような物が、深めの食器に入っていた。

私たちがイスにすわると、

「カオリちゃんのお母さんはお料理が上手だから、カオリちゃんの口に合うかねえ？」

おばあちゃんは、少し不安そうな顔をして言った。

私のお母さんは、公民館などで料理教室をしたり、レシピを作ったりしているからだ。

「いただきます」と言って、食べ始めると、

親子丼の卵は半熟でトロトロフワフワ、吸い物もカツオだしがきいておいしい。

「おばあちゃん、おいしかったです。」

ごちそうさまでした」

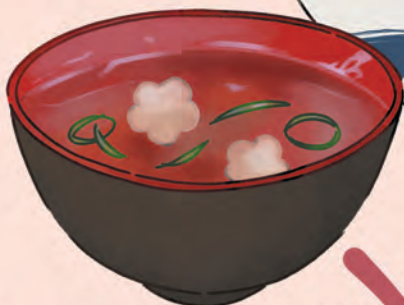
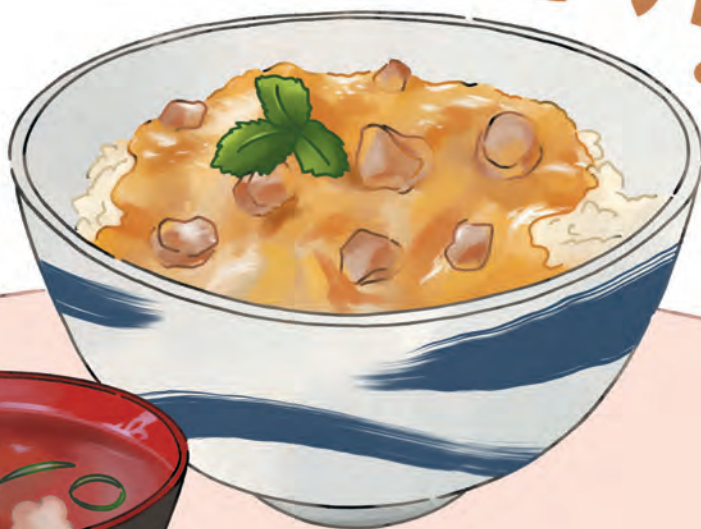
私はお礼を言った後、こげ茶色の豆のような物を指さして、聞いてみた。

「この豆みたいなもの何ですか？」

「これはね、ムカゴって言って、ヤマノイモの赤ちゃんみtainなものよ」

おばあちゃんが教えてくれた。

親子丼



花形の麩いり
お吸い物



「えっ、カオリちゃんムカゴ知らないの？」

サキちゃんがおどろいて言った。

「うん、私、初めて見たよ。食べてみていいですか？」

「どうぞ。いくらでも、お上がりなさい」

おばあちゃんは、小皿に取り分けてくれた。

ひと粒つまんで口に入れると、ムカゴのまわりに付いている塩の味がした。

かむと、ピーナッツの薄皮より厚めの皮の中から、グニャッと柔らかい芋みみたいな感じ

がする、不思議な食べ物だ。

「このムカゴ、うちの裏山で採れたんだよ」

サキちゃんはニコニコ顔で、ムカゴについて話してくれた。

秋になると、ヤマノイモの茎が、ニヨキニヨキとツル状に伸びてきて、細長いハート形

の葉っぱの付け根に、ポコポコと小さな豆のように出来るのが、食用ムカゴだという。

ムカゴを食べていると、おばあちゃんは、

「裏山で沢山採れるのだけれど、食べ方がよくわからないから、とりあえず塩ゆでにして
いるのよ。もっとおいしい食べ方があれば良いのだけれどね・・・お味はどうかしら？」

「はい、初めて食べたけど、何だか小さい里芋みたいな感じでおいしいです」

私は、正直に答えた。すると、

「じゃ、カオリちゃん、宿題終わったらムカゴ採り行こうよ」

サキちゃんが、大きな目をキラキラさせて言った。

それから私たちは、さっさと宿題を終わらせて、おばあちゃんを先頭に裏山に入ることになった。

私はスカートを着ていたの、サキちゃんのジーンズに着替えて、雨も降っていないのに、なぜかカサを持たされた。

サキちゃんはカゴ、おばあちゃんは長い棒を持っている。

山に入ると、すぐにハート形の葉っぱを見つけた。ツルをたどると葉っぱの付け根に、ムカゴが二つずつ付いていた。

「カオリちゃん、カサを広げて逆さにして」

サキちゃんと私は、ムカゴのツルの真下に、逆さに広げたカサの両側を持つと、

「ムカゴ落とすよー」

おばあちゃんが声をかけ、棒でツルをゆらし始めると、ムカゴがポロポロとカサの中に

落ちてきた。わあー、面白い。

ムカゴ採り初体験の帰り道、

「小さい頃はね、おばあちゃんとムカゴ採りに、裏山に行くのが楽しみだったんだ。

今は習い事が多くて、裏山に行けてなかったから、今日はカオリちゃんも一緒に来てくれて、おばあちゃん、すごくうれしそうだった。」

サキちゃんは声ははずませて話してくれた。

「私も楽しかった。裏山に入ったことなんてなかったし。ところでさ、このムカゴどうする？」

二人の両手ですくっても、こぼれそうな量のムカゴを見ながら言った。

「実はね、カオリちゃんにお願いがあるの。ムカゴのおいしい食べ方を知らないって、おばあちゃんが言っていたでしょ。カオリちゃんのお母さんだったら、おいしい食べ方を考えてくれるかな？ 来週の日曜日、おばあちゃんの七十七歳の誕生日に、おいしいムカゴ料理を作ってあげたいなって、思っているんだ」

サキちゃんは、幼稚園の頃からずっと、おばあちゃんが家にいてくれるおかげで、一人で留守番をすることなく安心できている。

なので、おばあちゃんに感謝の気持ちを伝えたくて、考えているようだった。

「わかった。お母さんに協力してくれるように頼んでみるよ」

私は、サキちゃんの計画に、ワクワクしながら家に帰った。

その日の夕食後、洗った食器をふこうとすると、

「あらっ、今日は早く手伝ってくれるのね。ありがとう」

お母さんは、私の顔を探るようにじっと見ながら言った。

いつもは、言われないと手伝わない私が、お願い事がある時だけ、自分から手伝いをし
てしまうのだ。

そんな心の中を見抜いているように、

「カオリ、お願い事がありそうね。サキちゃんの家で何かあったの？」

さすがお母さん、何でもお見通しだ。

「今日、サキちゃんの家の裏山にムカゴ採りに行ったの。おばあちゃんは、塩ゆでする食
べ方しか知らないんだって。」

それでね、来週の日曜日、おばあちゃんの七十七歳の誕生日に、おいしいムカゴ料理を
作ってあげたいから、お母さんに協力してもらいたいって」

私は、サキちゃんにお願いされた事を、ひと息に話した後、手の平を合わせ、お願いポーズをした。

話を聞き終わったお母さんは、うなずいて、

「わかったわ。サキちゃんは、おばあちゃん思いのやさしい子ね。そういうことなら、お母さん頑張っちゃおうかな。もちろん、カオリも手伝ってね」

私がお母さんの返事を、電話でサキちゃんに伝えると、ヤッターと大喜びしている。

早速、明日の日曜日、何を作るか打ち合わせを、家ですることになった。

日曜日の午後、お父さんと弟のヒナタがプロ野球観戦に出かけた後、サキちゃんが昨日採ったムカゴを持ってやってきた。そして、

「こんにちは、カオリちゃんママ。今日はよろしくお願いします」

丁寧におじぎすると、

「いらっしやい、サキちゃん久しぶりね。さあ、上がって」

お母さんは、うれしそうにキッチンに案内した。

そして、テーブルに置いたムカゴで何を作るか、三人で話し始めた。

「おばあちゃんが好きな食べ物ある？」

お母さんがサキちゃんに尋ねると、

「うーん、特別に好きなものは思い当たらないのですけど、一度ムカゴの炊き込みご飯を作った時、何だか色合いが地味だからって、二度と作りませんでした。

何か、パツと見て色がきれいな物が好きなのかな、と思うんです」

「そうねえ、おばあちゃんは、お洋服も明るい色を着てらっしゃるし、ムカゴの色は好みの色とは反対よね」

私も何か意見を出さなきゃと、あわてて、

「じゃあ、ムカゴを使ったカラフルなお料理を、作れば良いんじゃないの？」

そう言ったとたん、お母さんが私を見て、

「あらっ、カオリは簡単に言うけど、それを実現するのは、なかなか難しいわよ」

私は、とんちんかな事言っちゃったかな、と思っていたが、お母さんは少し考えて、

「そうね。ヨシツ、そのカラフルなムカゴ料理、作ってみましょう」

まさか、自分の意見が通るとは思わなかった。

すぐに私たち二人は、お母さんの指示を受けながら、試作が始まった。

最初は、おばあちゃんが地味で二度と作らなかった、ムカゴご飯を作るといふ。

私たちは、「えーっ、どうして？」と思っただが、お母さんの頭の中には、カラフルな料理のイメージがすでに出来上がっているようだった。

まず、ムカゴを洗ってザルに上げておく。次は、炊飯器に、お米とムカゴ、缶詰のコーン、チキンスープを加えて炊く。

炊き上がったら、しょう油とバター、ゆでた枝豆を加えて混ぜて出来上がりだ。

「うーん、いいにおい」

しょう油とバターの香りが、キッチンに広がっている。

地味だと言われたムカゴご飯は、鮮やかなコーンの黄色と枝豆の黄緑色、明るい色が加わったことで、ムカゴのこげ茶色が引き立っている。

「わーっ、かわいい色」

つい、二人で声をあげてしまった。

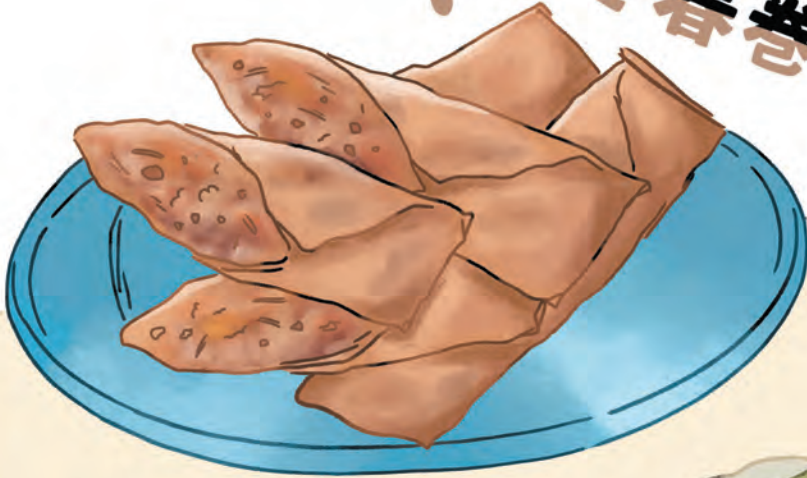
「こんなカラフル水玉みたいなご飯なら、おばあちゃん喜んでくれそうです。

カオリちゃんのお母さんスゴイ」

味も大事よと、試食タイム開始。

三人同時に「おいしい」って言うものだから、顔を見合わせて笑ってしまった。

ムカゴの
焼き春巻き



ムカゴの
カラフルご飯



ムカゴの
抹茶ケーキ

ご飯だけではさみしいからと、その後も数種類のムカゴ料理を作って、試作した中から三品を選び作ることに決めた。

メニューは、ムカゴのカラフルご飯、ムカゴの焼き春巻き、ムカゴの抹茶ケーキだ。

私たちの意見を聞きながら、お母さんに考えてもらったので、サキちゃんも満足そうに帰っていった。

一週間たって、いよいよおばあちゃんの誕生日がやってきた。

おばあちゃんには、料理が出来上がった頃に連絡する予定で、サキちゃんの両親も一緒に来てくれることになっている。

サキちゃんと私は、お母さんが考えたレシピ内容をしっかり覚えていたので、予想以上にうまく出来上がった。

ムカゴ料理の他に、みんなが好きなので、から揚げや茶わん蒸しも用意した。

お母さんが言うには、お祝い事の日は「ハレの日」と言うらしい。その中でも七十七歳は、「喜寿」という長寿のお祝い事。

本当は数え年でお祝いするそうだが、最近では満七十七歳でお祝いすることも増えているそうだ。

「喜寿」のテーマカラーは紫色だといので、プレゼントには紫色のスカーフを選んだ。

料理が出来上がったことを連絡すると、すぐに、おばあちゃんたちがやって来た。

玄関には、おばあちゃんとサキちゃんの両親が並んで、「今日は、お世話になります」と、うちのお父さんにあいさつしていた。

おばあちゃんを中心に座って、テーブルの上には沢山の料理が並べられ、その中でも、きれいな色合いのムカゴ料理に、みんなはおどろいていた。

「では、準備も整いましたので、始めましょう。サキちゃんのおばあちゃん、『喜寿』おめでとうございます」

お父さんが言うと、

「今日は私のために、みんなでお祝いしてもらえてありがたいです。」

サキがカオリちゃんとおいしいムカゴ料理を作ってあげるよ、と言っていたけれど、まさかムカゴが、こんなオシャレな料理に変身するなんて、思ってもみませんでしたよ。カオリちゃん、サキ、本当にありがとう。

さあ早く、いただきたいわ」

おばあちゃんが「おれを言ったとたん、弟のヒナタは、ジュースが入ったコップを高く上げると、大きな声で、

「サキちゃんのおばあちゃんにカンパニー」

それから、おばあちゃんは、一口食べるたびに、おいしいね、おいしいねと、始終ニコニコ顔で沢山食べてくれたので、サキちゃんと私は、「やったね」とハイタッチして喜んだ。

食べ終わって、プレゼントを渡し、一緒に写真も撮った。

おばあちゃんは、プレゼントした紫色のスクーフを首に巻き付けると、おどけたポーズをとり、皆を笑わせてうれしそうだ。

楽しい時間が過ぎて、見送りに玄関に行くと、サキちゃんの両親が私の前に来て、「カオリちゃん、いつもサキと仲良くしてくれてありがとう。これからも、よろしくね」

そう言って、車で帰って行った。

「あーあ、ハレの日終わっちゃった。楽しかったなあ」

私が言うと、

「今日のムカゴ料理おいしかったし、ハレの日のご飯にピッタリだったよ。」

カオリ、頑張がんばって作つくってくれてありがとう」
お父とうさんから、思おもいがけないほめ言葉ことばが返かえってきたので、何なんだかくすぐったい気持きもちちになつた。

誰だれかのために作つくって、それをおいしいって言いってもらえるのは、とても良い気分きぶんだな、と初はじめて思おもえた。もしかしたら、お母かあさんみたいに料理りょうりに関かかわる仕事しごとをしている人ひとは、こ
ういう気持きもちちになりたくて頑張がんばっているのかな。

今いままでカオリは、将しょう来らいどんな仕事しごとをしたいか何なにも考かんえていなかった。

けれども、今日きょうの「ハレの日ひ」ご飯はん作つくりをきっかけに、誰だれかが喜よろこんでくれるような仕事しごとを出で来るようになりたい、と思おもい始はじめていた。

お雪のぞり

吉村 洋一

田にも畑にも野面にも、まだ雪ののこっている、二月なかごろのことだ。

日のくれがたに、一羽のやせほそったツルが、村里の川原にまいおりた。

ちようと、わたりがはじまっていた。オロシャという遠い国から、えさを求めてやってきた、オオハクチョウやコハクチョウ、ツグミ、ガン、カモ、ツルといった冬鳥たちが、子育てをするために、北へ向ってかえってゆく季節なのだ。

たいていのツルは、ながい空の旅と、シベリアでの子育てのために、あたたかいこの国で、たくさんえさを食べているはずだった。

ところが、そのツルだけは、おぼつかない足どり、しばらく川のアさいところに、えさをさがしていたが、食べるものも、食べていないうえに、けがでもしているのだろうか。なんだか羽をひろげ、とび立つそぶりをしたけれど、とうとう、つかれはてたように、

アシのなかほどに、すわりこんでしまった。

きつと、遠い北の国へかえるとちゆう、タカだが、ワシだかにおそわれ、きずつけられて、仲間からも、はぐれてしまったのかもしれない。

けれども、こういう水辺に身をよせてさえいけば、ワシや、タカだけではなく、イタチや、キツネや、野犬などから身をまもることができると知っているのだ。

まんいち、犬や、ワシや、キツネなどにおそわれても、ツルはするどく固いくちばしでついたり、ながい足でけったりして、勇敢にたたかう。

ところが、うごけなくなったツルは、えさをとることができず、そのまま息たえてしまいうしかなかった。

それでも夜があけると、ツルはしきりにあたりを見まわして、立ちあがろうとした。

しかし、それもむだだとわかったのだろうか。アシのあいだに身をかくし、ながい首を羽のなかにうずめるようにして、目をつむった。

水面のうえには、あさもやが立ちこめて、しばらく、サラサラという水の音ばかりがきこえていた。

やがて、水音とはちがった、かすかな音がちかづいてきた。ツルは、すこしだけ目をあ

けて、ながい首をのばした。

すると、目のまえに、黒い大きなひとみを、さらに大きく見ひらいて、小さなおんなの子が立っていた。

(どうやら、にんげんの子どものようだ)

とツルはおもった。

にんげんというものを、こんなにちかくで見たのは、はじめてのことだった。

ツルは、とっさににげようと、身がまえた。ところが、からだは、すこしもいうことをきかなかった。おもったより、羽がひどくきずついていた。

しばらくおんなの子はツルと、にらみあっていたが、

「つ……る」

ひとこと、そうつぶやいただけで、おそってくるようすはなかった。

さいわいなことに、おんなの子は身をひるがえし、しろい息ばかりをのこして、すぐにかけていってしまった。

ツルは、まわりを見まわした。

いまいるところは、川の中州にでもなっているのか、目のまえで流れが二つにわかれて

いた。

川のかたわらに道があるらしく、ときおり足音がきこえてくる。

まだ暗いうちから、ちらほらと、ひと声が川下におかかっていくのは、きっとそこに、田や畑があるのかもしれない。

朝はやくから、日がしずんで、じぶんの手のひらさえも見えなくなるころまで、村人は、はたらきづめに、はたらきつづけているようだった。

あたりは、しんとしずまりかえって、水の流れる音が大きくなった。

すぐにまた、砂利をふむ音がしたかと思うと、目のまえに、さきほどのおんなの子が立っていた。

ツルは身がまえたものの、にげだすどころか、もう羽をうごかすちからも、のこつてはいなかった。

すると、おんなの子は、それまでしっかりとにぎりしめていた小さなこぶしを、パツとぶちまけるようにひらいたのだ。

目のまえに、ふってきたものをながめて、ツルはおどろいた。

われたお米や、ひからびた麦のかけらや、もみから、やさいくず、カヤツリグサの根、



貝がらの粉、魚の骨などが、茂みのあいだにちらばっている。

ツルは用心しながら、首をのばせるだけのばして、ひさしぶりの食べものをついばんだ。

おんなの子は、そまつなきものの胸を手でおさえると、

「オ、ユ、キ」

と、なんどもくりかえす。

ツルは、ふしぎそうに首をかしげた。

それから、まいにち、お雪は食べられそうなものを、なにかしら、ふたつのこぶしにつかんできては、ツルの目のまえに、そつとまいた。

しもやけでふくれた、かわいい足には、いつも、そまつな赤い鼻緒のぞうりをはいていた。

三日目には、その小さな手のひらから、じかについばんで食べるようになった。

お雪が背中を見せて、かけもどろうとしたときだった。ぞうりでふみつけた小石が、くるりと返って、その場にころんでしまったのだ。

どうやら足首をくじいたらしく、しくしく泣いていたが、そのまま立てなくなってしまうた。

その日、お雪の両親は、暗くなくても、もどってこないおすめをあんじて、ひとばんじゅう、村のあちこちをさがしまわった。

鎮守の森にも、うら山にも、よその家の納屋にも、お雪のすがたはなかった。

川上から川下まで、声をかぎりになまえをよびながら、目のいろをかえて、さがして歩いた。

夜があげると、村のわかものにたのんで、手わけしてさがしたけれど、日が山にかくれるころになっても、お雪はみつからなかった。

神かくしにあったのだとか、ひとさらいにつれていかれたのだとか、森や山にすむという、おそろしいケダモノに食べられたのだとかいうものもあった。

そんななか、ひとりの村人が、

「かわったことといえは、四、五日まえに、川の中州で、ツルを一羽見かけたが……」
といいました。

「もしも、子どもがくちばしで、突かれたりしたら、おおごとじゃ」とつけくわえた。

くわしく聞いてみると、朝がた、水辺のアシの茂みにすわりこんでいる、ツルの頭をた

しかに見かけたというのだ。

「ばかをいいなされ。ツルなら一羽きりでおることはないはずじゃ」

村おさは顔をしかめた。

すると、ちようど山から下りてきた獵師が、息で手をあたたためながら、

「一羽きりならば、それはツルではあるまい。サギのたぐいであろうよ」

と声をかけた。

老人は、玄蔵という名の腕のよい獵師で、村人から玄じいとよばれて親しまれていた。

玄じいは、のんびりとこういった。

「ツルならば、たまごを抱くときよりほかに、足をたたんで休むことはない。けがでもし

ていなければ、ねむるときでも、水のなかに、かた足で立ったままよ」

なぜかとたずねる村人に、

「水のなかにさえおれば、天敵のキツネやタヌキや犬も、なかなかちかよれぬ道理じゃ」

とおしえた。

「かすかな水音や小さな波紋が起れば、飛び立ってにげることができるといわけか」

村おさも、がってんしている。

「どういうわけで、立ったままねむるんじやろうな。それも、かた足で」

「ツルは頭のよい、用心深い生きものでな。すぐにも、飛び立てるようというほかに、水につかって冷とうなった足を、かわるがわる、あたたためておるのよ」

「ほほう。ツルがじぶんの足をあたためるかね」

村人が首をかしげた。

「そうよ。水につかっていないほうの足は、羽のなかにしまっておくのじや。ほれ、いまあんたがやっとなるように」

村人は、ふところにつっこんでいた手をだしながら、にが笑いだした。

「頭のいいもんじやのう」

「わしは、ワナにかかったツルを、にがしてやったことがあるが、からだがまるで熱い、熱い、出で湯のように、ひどくあたたかかったのをおぼえておる」

うなずいてみせると、

「冬場、水に足をつっこんだまま、えものを追うときには、わしもツルのようになかったころをすることがあるわい」

老人は、じぶんの背中にくくりつけている、種子島をかつぎなおしながら、にやりと

笑った。

村人の話を聞きながら、お雪の母のお松は、

(ツルなど、どうでもよいから、いつときもはやく、おすめをさがしてほしい)

気もそぞろだったが、いても立ってもいられなくなって、玄じいの袖をつかむと、道のかたわらに引っぱっていった。

「玄蔵さん。じつは……」

玄じいにお雪がいなくなったことを、ひそひそとうちあけて、見かけなかったかたずねてみた。

玄蔵老人は、お松の話を聞いて、まっ青になった。

五年まえのことだ。

その日は朝から、えものにめぐまれず、ひぐれまえに里に下りようとして、玄蔵が足をいそがせていると、みような声を耳にして足を止めた。

そこは、となり村の里にちかい森のなかだった。

(このようなひとけのないところで、まさか)

玄蔵は、赤児の泣き声を聞いたようにおもったのだ。

そら耳かとおもいながら、声のするほうに歩みよると、一本のミズナラの木の下で、やせた女がよこになっていた。

もう息をしていないことは、ひと目でわかった。

「いきだおれじゃ。あわれなことよ」

手を合わせたあと、里びとにしらせてやるために立ちさろうとして、女のふところ、なにかがうごめいているのに目をとめた。

(なんと、赤児ではないか)

赤ん坊は、母親のやせた乳首を口にふくんで息をしている。

玄蔵は息をのんで子どもをだき取り、ふところに入れてあたたためてやりながら、ふと考えた。

里ちかくで、いきだおれになったにしても、身もともわからぬ赤児を引き取ってくれるかどうか、わかったものではない。だれもみな貧しいのだ。

玄蔵は、くるりと身をひるがえし、もときた道をさして歩きだした。

玄蔵には目当てがあった。

やがて、目のまえをさえぎるように、小雪がちらつきはじめた。

ちようど日が落ちかかるころ、老人はお松の家の戸をほとほとたたいた。

身につけていた蓑にも、笠にも、うっすらとしろいものに乗っていた。

玄蔵が一部始終をうちあけると、子どもにめぐまれなかった夫の与助も、お松も、よろこんで育てることをやくそくしてくれた。

それどころか、どうぞ育てさせてもらえないかと、おがまれてしまった。

「まず、よかった、よかった」

玄蔵は胸をなでおろした。

赤ん坊は、お雪と名づけられ、貧しいながら、げんきに育ったものの、どういいうわけか、ふたつ、みつつをすぎても、ひとつも口をきかなかった。

そういうめぐり合わせがあったため、玄蔵にとって、お雪は、じぶんの孫むすめのように、かわいかったし、責任もかんじていたのだった。

(そのお雪がゆくえしれずとは)

玄蔵は、じぶんから、いっしょにお雪をさがさせてくれるようにたのんだ。

「それはありがたいが、もう日がくれる。せまいところじゃが、こんやは、うちにとまっ
てくだされ」

父親ちちおやの与助よすけは、玄じげんいにすすめた。

村人むらびとたちは、つかれきって、それぞれ家いえにかえっていった。

玄じげんいと、お雪ゆきの両親りょうしんとは、かえる道みちすがら、ねんのために、アシあしの茂しげる中州なかすをさがし
てみることにした。

氷こおりのように冷つめたい浅瀬あさせをわたって、中州なかすにあがったころには、くもった空そらから、また、
しろいものが落おちてきた。

三人さんにんが、もうあきらめて、かえろうとおもいはじめたときだった。

「おっ！」

玄じげんいがさげんだ。

与助よすけが、なにごとかと老人ろうじんの足あしもとをのぞいてみると、羽はねをなかば広ひろげるようにして、
ぐったりと身みをよこたえている、しろいものが目めにはいった。

それは、さがしもとめていたお雪ゆきではなかった。やせほそって、ぐったりとしている、
ツルのすがただった。

「どうしてツルがこんなところに。それも、たった一羽いちわきりだけで
与助よすけが首くびをかしげた。

「ツルを見かけたというのは、やっぱり、ほんとうじゃったな」

「風切りかぜきが折れとるわい」

「長年ながねん、獵師りようしをしているだけに、玄蔵老人げんぞうろうじんには見ただけで、わかるようだ。

「息は、しておりますかの」

与助よすけは、玄じいげんの顔かおを見まもった。

「まだぬくもりは、のこつとるが」

老人ろうじんは、ゆつくりと首くびをふった。

「かわいそうに、いまごろ仲間なかまたちは、北きたのふるさとにおかかって、旅たびをしておるところ
じやろうに」

「遠いところでしょうか、そのふるさととやらは」

お雪ゆきの母親ははおやがたずねた。

「おう、遠いとも。千里せんりものさきじやというぞ」

「なにかのえにしじや。どこぞへ、ほうむってやりましょう」



いいかけた与助が、

「あつ」

と声をあげた。

「ぞうりじゃ、おすめのお雪のはいておった、ぞうりじゃ」

見ると、なるほど小さなぞうりが、ツルのからだの下からのぞいている。

(まさか、お雪はツルにおそわれて、きずつけられたのであるまいか)

いやな予感が三人の頭をよぎった。

老人が、そつとツルをだきとってみると、からだをまるめるようにして、目をとじてい

る、お雪があらわれた。

「まあ、お雪！　こんなところに」

母親は、さけびながらかけよった。

「いきとる、いきとるぞ」

玄じいのしわ深い顔がほころんだ。

「このさむさのなかで、よう、生きとってくれたのう、お雪」

父親の与助はなみだぐんで、よろこびの声をあげた。

三人の声（こえ）がきこえたのか、お雪（ゆき）は目（め）をさました。

しばらく、きよとんとして、あたりをみまわしていたが、そこに母（はは）の顔（かお）をみつけると、わっと泣（な）きだした。

「いたいよう、いたいよう」

お雪（ゆき）は足首（あしくび）をおさえながら、母（はは）の胸（むね）に顔（かお）をうずめて泣（な）きじゃくった。

「おう。お雪（ゆき）が、お雪（ゆき）がはじめてものをいうたぞ、お松（まつ）」

与助（よすけ）は、ぼろぼろなみだをこぼしながら、お松（まつ）と手（て）を取りあってよろこんだ。

玄（げん）じいは、

「よしよし。もういい、もういい。泣（な）かんでいい。骨（ほね）は折（お）れとらんようじゃ。足首（あしくび）をねん

ざしたばかりよ。よかったのう、お雪（ゆき）坊（ぼう）」

お雪（ゆき）の足首（あしくび）をたしかめていった。

「このツルが、このツルが、お雪（ゆき）をだいて、あたためてくれておりましたのじゃなあ」

玄（げん）じいの声（こえ）と、母（はは）親（おや）の泣（な）き声（こえ）とが、うすぐらい川原（かわら）に、ひびきわたった。

川原（かわら）と、ツルのやせほそったからだをおおいかくすように、雪（ゆき）はあとからあとから落（お）ちてきた。

ぼくの素敵な友だち

樋口 達也

来週から新学期が始まるという春休みの午後、ぼくとお父さんは、近くの公園でキャッチボールをしていた。

お父さんが投げたボールを捕り損なったぼくは、ボールのあとを全速で追いかけた。ちようどベンチに座っていたおじいさんが、転がってきたそのボールを拾うと、思いきり投げ返してくれた。

戻ってきたボールが、思ったより速くて、グローブにバシッと納まったから、ぼくは、「おじいちゃん、若くい」と、言ってしまった。

「涼！ 『ありがとうございます』 やろが！」
お父さんが、大きな声でそう言ったので、ぼくは、あわてて、

「ありがとうございます！」

と、頭を下げた。

おじいさんは、笑顔で両手を振ってくれた。

その晩の夕食の時、お父さんが、こんな話をした。

「お父さんの職場の課長さんの話だけどさ。課長さんが、バスに乗っていたとき、バスの座席はいくつも空いていたんだけど、すぐ降りるので、立っていたんだそうだ。そしたら、運転手さんが、『おじいちゃん、吊革につかまってください』と、言ったんだと。課長さんは、誰か立っている年配の方がおられるのかと思って、後ろを振り返って車内を見たらいいんだ。ところが、他に誰も乗っていないかった。バスに乗っていたのは、課長さんだけだったんだ。それで、課長さんは、ああ、おじいちゃんというのは、自分のことなんだと思っただ。とてもがっかりした、と言われていたよ」

「課長さんって、その時、いくつだったの？」

「五十七歳。でも、頭の毛が薄いので、老けて見えるんだけどね」

お父さんがそう言うとき、お母さんが、

「五十七歳で、おじいちゃんは、かわいそうだね。それは、運転手さんがよくない！」



と、きっぱり言った。

「だろう？　そこで、涼に聞きたいんだ。運転手さんが、何と言っていたら、課長さんは、傷つかなかったんだらうねえ」

「えっ、そうだねえ、普通に、『お客さん、吊革につかまってください』と、言っていたら良かったかねえ」

「その通り。さすが、ようわかっとなるやないか。そこでや・・・」

ぼくは、アツと思った。そうか、お父さんは、公園のキャッチボールの時のことを言いたいんだと、ピンときた。

こんな時は、先手を打つに限る。

「今日さ、キャッチボールの時、ぼく、なんで、ありがとも言わないで、『おじいちゃん、若くい』なんて、言ってしまったんだらうね」

「よう思い出した。さすが、涼や」

「何の話？」

お母さんが、聞いたので、ぼくは、あらましを正直に話した。

「そっか、もしかしたら、その方、がっかりされたかもしれないわね」

「ボールが、速はやかったんで、おじいちゃんにしては、すごいと思おもったんだ。それで、『若わかくい』と、言いったんだ。言いいたかったのは、『おじいちゃん』じゃなくて、『若わかくい』の方ほうだったんだよ」

「『おじいちゃんにしては』って、涼りょうは、心こころのどこかで、老人ろうじんだから速はやく投なげられないって、上うえから目線めせんになっていたんじゃないか？」

お父とうさんがそう言いうと、今こん度はお母かあさんが、「お隣となりの奥おくさん、今ことしはちゆうさんさいなられたんだけど、私わたしは、一いち度もおばあちゃんなんて言いったことないわよ。奥おくさんか、名な字じの田中たなかさんって言いうわよ。おばあちゃんって、言いわないようにしてるの。田中たなかさんを人じん生せいの先せん輩ぱいだと思おもって、つまり、敬けい意いを払はらってるのよね」

と、遠と回まわしにぼくを責せめつつ、自じ分ぶんを褒ほめた。

「敬けい意いって何なに？」

ぼくが聞きくと、

「相あい手てを尊そん敬けいする気き持もちってことだな。『老ろう婆ばは一いち日にちにしてならず』っていうだろ？ 今いまは老ろう婆ばでも、若わかいときは、美び人じんでキヤリアウーマンで、子こ育そだてが上じょう手ずなお母かあさんで、みんなから尊そん敬けいされてたかもしれないじゃないか。人じん生せいの先せん輩ぱいたちには、敬けい意いを持もたないとな」

お父さんは、そう言うと、テーブルの皿や茶わんをお盆にのせて、キッチンの流しに持って行った。

お母さんが、今年生まれたばかりの妹の由美を抱っこして、あやしながら、

「老婆は一日にしてならずじゃなくて、ローマは、一日にしてならずでしょ！」
と突っ込むと、お父さんは、

「どっちも似たようなもんさ」

と、水を勢いよく出して、食器を洗い始めた。

数日後、新学期の朝、通学路の横断歩道の信号の前に見守り隊の高木さんともう一人新しい人が立っていた。

「おはよう。今日から、みんなの見守りをしてくださる佐々木さんです」

ぼくたち小学生数人の前で、高木さんは、新しい見守り隊員の方を紹介した。

「佐々木です。よろしく」

と、その人は、帽子を取った。

白髪交じりの頭に、見覚えがあった。

「あっ、この前、公園で、ボールを拾ってくださいましたね。あの時は、ありがとうございます」

いました」

ぼくは、「敬意」を思い出していた。

佐々木さんは、にっこり笑って、

「ああ、『若くい』と言ってくれた子だね」

と言って、ぼくの肩に手をかけて、その手を差し出してきたので、ぼくたちはいつの間にか握手をしていた。

横断歩道を渡ると、同じクラスの直也が、

「知ってたの？」

と、聞いてきたから、佐々木さんとの出会いのこと、そして、お父さんから注意されたことを話した。

それから毎朝、佐々木さんに会うと、ハイタッチをするようになった。

信号が青に変わる少しの時間に、ぼくは、毎日、佐々木さんといろんなことを話した。

帰りの見守りのときも、ぼくが遅くなったりすると、家まで送ってくれたりもしたから、二人で何でも話した。

ぼくは、学校のことを話して、佐々木さんは、昔のことや趣味や家族のことを話した。

出版社で働いていたけど、五年前、六十五歳の時にその会社が倒産したこと。趣味は、読書と将棋と釣りで、この春から童話を書くようになったこと。童話作家は、若いときの夢だったそうだと。東京にぼくと同じ年の女の子の孫がいることもわかった。

「子どもの頃、何して遊んでたんですか？」

朝、信号待ちの短い時間にいつものように、聞いてみた。

「野球だよ。と言っても、三角ベースで、ボールも素手でとれる柔らかいゴムのやつで、バットは、竹だったけどね。グローブやバットなんて買ってもらえなかったんだ。あ、信号、青だ。今日も頑張ってな！」

佐々木さんは、何を聞いても答えてくれる。

佐々木さんが、「今日も頑張ってな！」って言うってくれるので、去年よりも、何か頑張れているような気がする。

毎年、四年生には、高齢者との交流を通して学ぶ「総合学習」の時間がある。今年、六月に準備して、七月にその交流を楽しむことになった。

去年は近くの老人ホームに出かけて行って、歌を歌ったり、折り紙をしたり、ゲームをしたりしたそうだが、今年、近所の高齢者の方を学校にお招きすることになった。

六月の初め、交流学习について話し合った。担任の堀内先生が、「ご高齢の皆さんと、どんな楽しいことができると思いますか？」と、言われたので、ぼくは、

「柔らかいゴムのボールで、野球ができればいいなあと思います」と、言った。

「走ったりするのはどうでしょうねえ。転んで怪我をされるかもしれません」

「ゲートボールとかグラウンドゴルフはどうですか？ ぼくのおばあちゃんもやってます」

直也が、そう言ったけど、

「ご高齢の皆さんがすべてお出来になれるわけではないし、あなたたちだって、練習しないと、却下された。」

「なぞなぞ」は、高齢者には難しいらしく、ほとんど手が上がらない。

「お手玉」は、玉をとれない人が多い。

「歌」は、一緒に歌える歌が少ない。声が出ない人もいる。

「ゲーム」は、ルールを説明するのに時間がかかる上に、楽しめていない人が多かった。昨年も四年生の担任だった堀内先生のダメ出しは続いた。

結局、お茶会になった。

招待したい高齡の方に招待状を書いて、グループに一人か二人の方を招待する。

「楽しい会話」が、学習の目標になった。

ぼくたちがお茶を入れて、お菓子は、実家の和菓子屋が隣町にある堀内先生が、ヒット商品『梅最中』を持って来るようになった。

週末の夜、ぼくは、佐々木さんに招待状を書いた。

月曜日の朝、その招待状を渡すつもりでいたら、信号の前に佐々木さんはいなかった。

「佐々木さんは？ 今日はお休みですか？」

高木さんに尋ねた。

「佐々木さんなあ、自転車で買い物に行かれての帰りに、転倒されたんだって。足首の複雑骨折で、しばらくお休みされるそうだよ」

高木さんは、そう言うのと、今学期いっぱいは無理かもしれないね、と付けくわえた。

ぼくは、高木さんに佐々木さんの住所を聞いて、直也と二人で行くことにした。

西郷川の川沿いの道にきれいな紫陽花の花が道なりに咲いていた。

その紫陽花の道をつバメがスツと横切った。

佐々木さんのマンションに着いて、インターホンで名前を告げると女の人が、どうぞお入りください、と言った。

五階の海が見える部屋のソファに佐々木さんが座っていた。

「よく来てくれたね。ありがとう」

満面の笑みでそう言った佐々木さんの横で、ぼくのお母さんぐらいの年齢の女の人が、「父が見守り隊を休んだので、わざわざ心配して、来てくださったのね。ありがとう。お父さん、見守り隊って、逆に子どもさんたちに見守られてるってことかもね」

と言って、につこりと笑った。

壁に佐々木さんと奥さんらしい人の写真が飾られていた。

「佐々木さんの奥さんですか？」

ぼくが聞くと、

「そうだよ。去年の暮、急に亡くなってね。前日まで元気だったんだよ。心筋梗塞ってやつでね。あ、そうそう、冷蔵庫にショートケーキがあった。幸、出してくれないか」

佐々木さんは、そう言って、松葉づえで立ち上がると、テーブルの椅子に座って、ぼくたちにも座るように勧めた。

ケーキをいただきながら、

「高齡の方と一緒に何かしたかったです、今年は、とりあえず、お茶会になりました」と、直也がお茶会のことを切り出した。

「いろいろお話して、楽しい時間を過ごせたらいいなっています。ぜひ、ぜひ、おいでくださいね」

僕は、招待状を出した。

「まあ、お父さん、素敵ね。真奈美と同じ年の子どもさんたちとお茶会だなんて」「東京じゃ、こんなことないのかい？」

「若者の街だもん。福岡は情があつていいな」

「この足で、学校の階段上れるかな」

「松葉づえ上手だし、行けるわよ。大丈夫」

「幸さんは、ぼくたちにVサインをした。」

学校の花壇の大輪のヒマワリが咲き誇っていた七月の初めに、お茶会があった。

近所の高齢の方十人が、来てくださった。

初めにぼくたちが練習した「故郷」を堀内先生のフルートに合わせて歌った。

「うさぎ追いし・・・」と歌い始めたら、ゲストの皆さんの何人かが、小さな声で口ずさんでいた。

歌が終わったら、各グループでのテーマトークだ。題は「今年一番うれしかったこと」。

ぼくのグループには、直也と直也のおばあちゃんと、佐々木さんがいた。

直也のおばあちゃんは、グランドゴルフで優勝したことを話した。

ぼくは、佐々木さんのことを話そうかと思っただけど、やっぱり内緒がいいと思って、

「僕が今年一番うれしかったことは、一月に家族が増えたことです」

と、妹が生まれた日のことを話した。

佐々木さんは、こんなことを話した。

「春、散歩の途中に公園で休んでいたら、お父さんとキャッチボールをしている小学生がいました。その小学生が捕り損なったボールを拾って投げてあげたら、その子が、『おじいちゃん、若くい』と言ってくれたんです。私は、『若くい』と言われて、とてもうれしかった。うれしかったから、まだ若いうちに何か役に立つことをしたいと思いました。そ

れで、四月から、見守り隊に入りました。そしたら、その『若くい』と言ってくれた男の子と再会できて、友だちになれました。それが、今年、一番うれしかったことです」

ぼくは、うれしくて、恥ずかしくて、下を向いてしまった。

司会の直也が、ニヤニヤしながら、

「とてもいいお話ですね。ぼくも、帰ったら、おばあちゃんに、『若くい』と言ってあげたいと思います」

と、言った。

一人一人が話し終えて、「堀内菓子店」の「梅最中」を食べ終わった頃、先生のフルートの十八番、シヨパンの「ノクターン第二番」が流れた。この曲が、会の終わりの合図だ。演奏が終わって、拍手が鳴り止むと、挨拶係がお礼を述べて、交流会は無事終了した。

その日の夜、お父さんと庭で花火をしているとき、佐々木さんの話を伝えた。

「涼の『若くい』が、よほどうれしかっただね。年の離れた『友だち』。素敵だね」

「うん。佐々木さんが、ぼくのことを友だちって言うってくれてとてもうれしかったんだけど、帰りに、ありがとうございますって、言いそびれちゃった」

「佐々木さんの足が治って、二学期また見守り活動を始められた時、言えばいいさ」

お父さんは、そう言うのと、缶ビールを旨そうに飲んだ。

それから、夏休みが始まって、夏休みがあと数日となった頃、高木さんが訪ねてきた。「東京のお孫さんが、おじいちゃんとう暮らしたいと言ったのと、娘さんのご主人が、同居してくださいと、何度も電話してきたので、東京行きを決めたそうです。車の免許も返納されていたし、足の怪我の後遺症もあったから、同居はよかったかもしれません。佐々木さん、涼君に『若い』と言われて、まだ『若い』うちに昔の夢を叶えたいと、童話を書き始めたそうです。童話を書いていると、妻を亡くした寂しさも和らいだと、言っておりました。これ、涼君にと頼まれた童話です」

高木さんは、童話と佐々木さんの住所と電話番号のメモを置いていった。

ぼくは、すぐに、その童話を読んだ。

童話『紫陽花の虹』
作 佐々木進

カエルの声がセミの声に変わるころ、紫陽花はもうずいぶんと弱っていました。

垣根の向こうには、向日葵が初夏の陽をいっぱいに浴びてスクスクと伸びているのが、見えました。

紫陽花は、明るく元気な向日葵をながめてこう思いました。

「向日葵さんとお友だちになりたいなあ」

そんな願いを持っていても、紫陽花には、もう歌う元気も踊る元気もなくなっているの
でした。

紫陽花は、深いため息をつくとき昔のことを思うのでした。銀色の雨に濡れて七色に輝いた昔を。雨だれに合わせて歌って踊った昔を。「ああ、雨さえ降ってくれば、もう少し元気になれるかもしれない」

紫陽花は、また深いため息をついてしよんぼりとするのでした。

「紫陽花さん、いったいどうしたの？ さっきからため息ばかりついて。何か心配事でもあるの？」

「ああ、軒下のツバメさん。実は・・・」

「何？ どうしたの？」

「実は、もう一度、もう一度だけ、雨に濡れたいんです。枯れる前にもう一度だけ」

「じゃ、トンビさんにお願いしてみますよ。トンビさんはきっと雨雲を引っ張ってきてくれますよ」

ツバメは、さっと飛んでいきました。

しばらくすると、空はみるみる黒雲におおわれて、大粒の雨がザーッと降ってきました。アマガエルも鳴き始めました。

「雨だあ！」

紫陽花は跳びあがらんばかりに歡びました。足の先から元気がぐんぐんわいてくるのはつきりと感じられました。体が自然に踊りだすような、あの感じがよみがえってきました。

「もう大丈夫、向日葵さんと一緒に歌える」

紫陽花はそう思うと、思い切って向日葵に声をかけました。

「向日葵さん・・・」

そう言いかけて、紫陽花はその声を思わず飲みこみました。

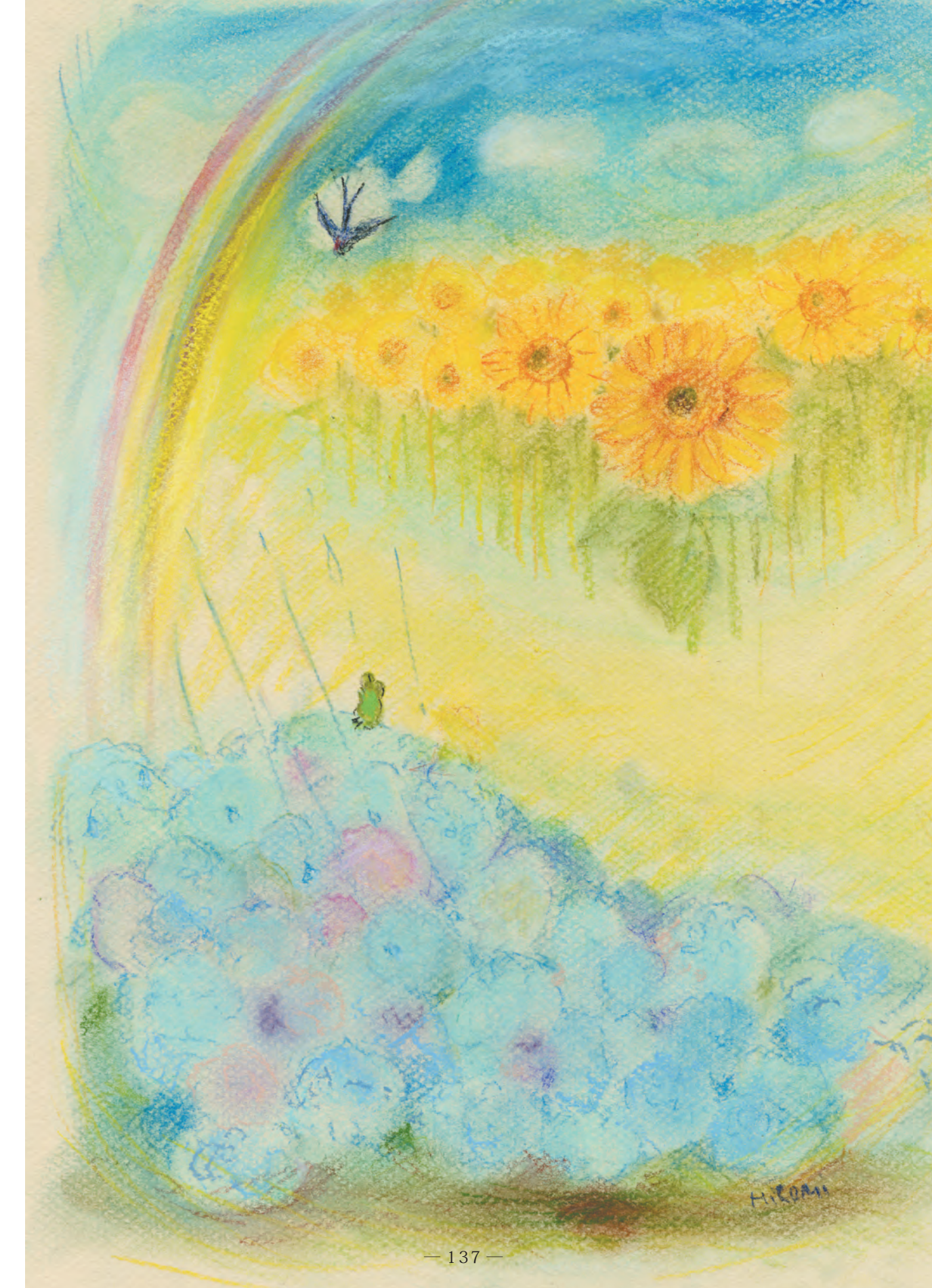
向日葵は、雨に打たれて地面に顔をすりつけんばかりになっていたのです。

「ごめんなさい」

紫陽花は、しょんぼりとうなだれてしまいました。

軒下でその様子をじっと見ていたツバメがやってきました。

「どうしたの？」



「向日葵さんは、雨がきれいだったんです。勝手ばかり言ってますみません。どうか太陽を出してください」

「わかったよ」

と、ツバメは、少しほほ笑んでさっと飛んでいきました。

しばらくすると、またギラギラの太陽が顔を出しました。セミも鳴きだしました。でも、不思議なことに紫陽花の上では、まだアマガエルが鳴いています。

そうです。雨は、紫陽花のところにだけは、まだ降っていたのです。

垣根の向こうの向日葵は、すっかり元気になって風にゆられて楽しそうです。

紫陽花もカエルと一緒に踊っています。

紫陽花と向日葵の間には、美しい虹のかけ橋が出ていました。

そのかけ橋の上を、ツバメが気持ちよさそうにすっと飛んで行きました。

紫陽花と向日葵は、どんな歌を歌ったのでしょうか。どんなお話をしたのでしょ

完

「紫陽花は、佐々木さんだわね」

童話を讀んだお母さんが、言った。

ぼくは、佐々木さんに電話をかけて、童話の感想を述べた。そして、あの時、「友だち」

と言いってくだいさいったことへのお礼れいを言いった。

「涼君りょうくん、年齢ねんれいは離はなれていても、場所ばしょは離はなれていても、ずととずとと友ともだちだよ」

「はい！ ぼくたち、消きえない虹にじで結むすばれた素敵すてきな友ともだちですね」

ぼくは、幸しあわせな気持きもちに包つつまれていた。

総 評

市民の童話に対する理解と関心を深め創作童話への意欲を高める。また、作品を通じて子どもたちの夢を育み、美しい心を育てる。この二つを趣旨として始まった「子どもたちに聞かせたい創作童話」も、今回で第四十六回となりました。今回は、第一部（保育園児・幼稚園児・小学校低学年向けの作品）百八点、第二部（小学校中・高学年向けの作品）九十点の計百九十八点が北は北海道、南は沖縄県の三十六都道府県から寄せられました。ファンタジーや生活体験を基にした童話、民話調の作品など、多様なジャンルがあり、家族愛や友情、共存共栄、希望、自然愛など、聞き手の発達段階にふさわしいテーマの力作揃いでした。本コンクールの趣旨を理解していただき、多数の作品が応募されたことをたいへんうれしく思います。

さて、今回もすばらしい作品が多く、審査も難航しましたが、

- ① 子どもたちに夢を育み、美しい心を育てたいという願いにかなう童話
- ② 正しく美しい言葉、読みやすい文章
- ③ 独自性（個性的で魅力ある作品）

の三つの観点に照らし、厳正かつ慎重に進めました。その中で、応募された作品について話し合われた内容をお示しいたします。入賞作品の詳細につきましては、各部の選評をご覧ください。

○ 美しい情景描写や比喻、会話文等を効果的に使い、丁寧に表現されていることで、楽しく読み進めることができる作品が多かった。しかし、山場がなく平板であったり、情景描写等が不十分であったりするため、場面を想像しづらいものもあった。

- 物語の構成や設定に独自性が感じられる作品が多かった。しかし、既存の作品との類似性が多く、オリジナリティがあまり感じられない作品も見られたので、しっかりと自分らしさを付け加えてほしい。
 - 対象年齢に応じた美しい日本語で丁寧に書かれた作品が多かった。しかし、その年齢では理解できないような表現が使用されているものもあった。子どもたちが聞いて理解できるように、説明的な叙述や注釈が必要ではないか。
 - ファンタジーの世界を描いた作品では、現実から空想、空想から現実に移行する際に、読者（聞き手）に違和感を感じさせないように工夫する必要がある。
 - 題名は、読書の興味関心を高めたり、物語の魅力を伝えたりする大切な役割がある。よく練られた作品もあったが、もう少し吟味・工夫が必要なものが散見された。
 - 子どもたちに聞かせたい創作童話ではあるが、自分で読むことも考え、子どもたちが慣れ親しんだ表記を使用した方がよい。
- 鹿児島県では、昭和三十五年に県立図書館長であった久保田彦穂（棕鳩十）氏が提唱した「親子20分読書運動」が全国に先駆け実践されました。そして、現在でもその精神は継承され、本市でも読み聞かせをはじめ様々な読書活動が積極的に推進されています。夢を育み、美しい心を育てるほかにも、読み聞かせの効果の一つとして、語彙力の向上があります。また、物語の構成等を感じることににより、論理性の獲得にもつながります。そのため、子どもたちに聞かせる物語には、吟味され練り上げられた美しい言葉や表現が求められます。
- これからもたくさん作品が寄せられることを期待しています。

入賞作品の選評

《第一部》

特選 「海からの電話」

- 物語全体が温かい言葉や美しい情景描写で彩られており、子供たちの夢や希望を育む爽やかな作品となっている。
- 全体を通して、平明な文章で書かれているため、低年齢の子供たちにとっても親しみやすく、安心して読み進めることができる。
- 登場人物は、サラちゃんとかかりのパスカルのみだが、二人の楽しくテンポのよい会話や心内語を効果的に組み合わせることにより、読み手はあっという間に物語に引き込まれる構成となっている。
- サラちゃんがパスカルの一つ一つ丁寧な言葉に誘導されながら、頭の中で考えていく場面では、岩や海の色を思い浮かべたり、波の音が聞こえたり、足に水がかかったりと、視覚や聴覚、触覚を効果的に使い、臨場感あふれる情景に仕上がっていた。
- サラちゃんが頭の中で考える場面の展開は、最初は、パスカルがいる海に、次は、虹色の部屋の中に、最後は、サラちゃんの部屋の中へと変化していくが、読み手もサラちゃんと一緒に様子を思い浮かべながら、楽しく読むことができた。
- 最後の場面は、サラちゃんとパスカルの今後について、余韻をもたせる終わり方となっており、最後まで読み手を惹きつける工夫がされていた。

入選 「ふしぎな野の花カフェ」

- 優しい春の香りが広がるような作品で、丁寧な文章で描かれています。
- チャコさんの歌う春の歌がとても素敵です。季節感が薄れ、自然とのふれあいが少なくなっている今、「ノビル」

入 選 「まほうのおえかきペン」

など春の野草を知らない子どもたちは多いことでしょう。そんな子どもたちでも春の野草に親しみがわき、またタンポポやシロツメクサなどが食べられることなど、自然への学びもできる作品です。

○ おばあちゃんが作るごはんは「土」のような地味な色で、ふきのとうのつくだには苦く、思わずねねちゃんは吐き出しておばあちゃんに怒られます。一方、チャコさんのカフェで、てんぷらやパンなど工夫されたものは苦味がうすれ、とてもおいしく食べられます。ねねちゃんとおばあちゃんがお互いを理解しあい、いっしょに春の料理を作ろうとするラストも前向きで、とても心温まります。

○ ちようちよや色とりどりの春の花が咲く野原で、チャコさんに教えられ野草をつんだねねちゃん。お料理の工夫だけでなく、自分で摘むという体験をしたからこそ、おいしく感じたのです。知識だけでは得られない、実際に自然に触れる「体験」の大切さも作品から感じ取れます。

○ チャコさんが実はタヌキだと、さらりというおばあちゃん。不思議な世界との境界があいまいなところに住んでいるおばあちゃんという設定も、作品をより味わい深い魅力あるものになっています。

○ 七夕行事で、家庭や幼稚園、学校などで子どもたちは思い思いの願いごとを短冊にかきます。七夕の夜、ひこぼしさまとおひめさまが会えますようにと、晴れることを願ってマイのように夜空をみあげる子どもは多いことでしょう。だれもが雨がやんでほしいと祈るマイの気持ちに共感でき、物語世界にすんなりと入ることができます。七夕の日を思い浮かべながら楽しんで読むことができます、夢いっぱい作品です。

○ マイの願いが通じて空から降ってきた不思議なペンは夜空に絵を描けるペン。心配だった雨も、黒いペンで雨雲をぬりつぶし、夜空にたくさん星も描き、さらに好きな食べ物まで描いてしまいます。空になんでも描けるといふ発想は魅力的で、子どもたちをワクワクさせることでしょう。

○ 思わず空を青く塗り、太陽を描いてしまったことで町中が大混乱、大変なことが起きてしまいます。起承転結もしっかりしていて、はらはらする展開に目が離せません。怖くなって反省したマイが、今度は空にはしごを描いてペンを返しに行く箇所もユニークで面白く、読者を引きこみます。

- おりひめさまと約束したまほうのペンの使い方も素敵です。
- 「〜です」という現在形の書き方が適切かどうか、文章表現を考えてみてほしい箇所が少し見られました。

入 選 「わたしもおねえちゃん」

- 双子のリコとマコは洋服やかばん、髪型、体の大きさもほぼ同じであるため、周囲の人からよく間違われる。そんな双子ならではの悩みや葛藤を、マコの視点で書いてあり、きょうだいのいる子供たちにとっても共感しやすい作品となっている。
- 物語の前半は、双子の「姉」「妹」としてではなく、一個人として見てほしい、接してほしいというマコの思いが、周囲の人々との会話や行動描写から巧みに表現されていた。
- 物語の後半のリコがジャングルジムから落ちた場面では、マコの心内語や情景描写から伝わる緊迫感にハラハラしたが、最終的に題名へとつながる展開に、心に温かいものが広がるような読後感にひたることができた。
- 最後の場面で「わらう」という言葉を繰り返し使ったことで、リコとマコの明るく希望に満ちた未来が想像でき心地よさに包まれた。
- 全体的にマコの繊細な気持ちや丁寧に書かれていただけに、リコがちかちゃんを遊びに誘って一人教室で本を読んでいた場面、リコがマコのことを大切に思っていることが看護師の言葉からマコに伝わった場面で、マコの心情の変化などをもう少し書き込むとよかったのではないかと感じた。

《 第二部 》

特 選 「あかり」

- 黄色いマツヨイグサの描かれた暖簾をくぐり、おじいさんが住んでいる世界（日常）とタヌキたちが暮らしている世界（非日常）を行き来し、動物たちと交流することで、おじいさんが元気を取り戻す様子が優しく描かれており、心温まる作品で、子供たちに聴いてもらいたいお話です。

- お話を聴く子供たちが、想像しやすいように、情景描写が美しい日本語で描かれています。また、山に雪が積もる様子を「山が白い帽子をかぶる」や奥さんの亡くなった後のおじいさんの様子を「おじいさんの心の時計が止まってしまった」など、比喩表現もあり、表現力の高さを感じました。
- おじいさんが非日常の世界で居場所を見つけ、必要とされたことで元氣を取り戻したように、現実の世界でもおじいさんやおじいさんの手芸店を必要としてくれていることに気づき、再びたみかけていた手芸店を再開する話は、自己有用感の高まりであり、話を変えれば子供たちの身近にある話で、対象学年にとって、すんなりと心に届くのではないのでしょうか。
- 再び店の「あかり」が灯り始めたこと、おじいさんの心にも「あかり」が灯り始めたこと、「山のあかり商店街」や暖簾の光が日常と非日常を繋ぐものであったことなど、作品中に、題名の「あかり」につながる要素が散りばめられていて題名への思いや工夫を感じました。

入 選 「おばあちゃんのハレの日ごはん」

- おばあちゃんのために、小学五年生の二人が母親に協力をもらいながら、おばあちゃんのハレの日を祝ってあげる心温まる作品です。また、話全体が色とりどりで明るい作品となっていて、子供たちに聴かせたいお話です。
- 「ムカゴ」について教えてもらう場面や「ムカゴ」をおばあちゃんに連れられて取りに行く場面など、「ムカゴ」を知らない子供たちにも分かるように詳しく丁寧に書かれています。また、「喜寿」や「ハレ」など、子供たちには、馴染みのない言葉が出てきますが丁寧に説明されています。
- 栄養士だから、いつもは食べることに關してうるさいという認識しかなかった主人公が、おばあちゃんのために母と一緒に、「ムカゴの料理」を考え、作っていく活動を通して、最後には、「栄養士」としての仕事について考えるなど、対象学年に聴かせたい作品になっています。
- 昨今、作品のような家族同士の付き合いが、ややもすると少なくなってきたのかもしれない。この作品を聴くことにより、家族同士の繋がりがやなんでも話し合える友達がいることの大切さなど、改めてコミュニケーションの在り方を考えることができます。

- カタカナを多く使用されていますので、漢字やひらがな表記の方が読みやすい作品になると思います。

入 選 「お雪のぞうり」

- 動物の生態を生息する自然の中で描いた高い描写力により、動物と人間が自然の中で共存する大切さを描いた作品である。
- 羽を傷つけ、えさもとることができなくなったツルが、食べ物をもってきた時にころんで立てなくなったお雪を、雪のふる寒さの中、自分の体であたため、命を救うという悲しさの中にも心温まる展開となっており、子どもたちが豊かに想像をふくらませながら読むことができる。
- 一言も口をきくことのなかったお雪が、動物との出会いにより言葉を発する場面は、動物のもつ不思議な力についても考えることができる。
- 道理、合点、出で湯、種子島、えにしなど、対象学年の子どもたちに理解が難しい言葉が見られ、解説が必要であると感じた。

入 選 「ぼくの素敵な友だち」

- 「年齢、場所は離れていても、消えない虹で結ばれた素敵な友達」になった四年生の涼と七十歳の佐々木さん。友達関係で悩むことも多い対象学年に、「真の友情とは何か」について考えさせることができる作品である。
- 涼の「おじいちゃん、若くい」の一言を発端に、家族での会話、見守り隊員となった佐々木さんとの関わり、高年齢者のお茶会、佐々木さんの東京行きなどを通して、変化する涼の心情に共感しながら読み進めることができる。
- 「若くい」と言われた佐々木さんが、まだ若いうちに役立つことをしたいと、小学生の見守り隊に入り、昔の夢であった童話を書き始め、自分の思いを童話で伝える希望に満ち溢れた展開が、心温まる作品としている。
- 会話文が人物像を明確にし、それぞれの思いに共感しながら読み進めることができる。

「第46回 子どもたちに聞かせたい創作童話」募集要項

子どもたちの夢をはぐくみ、美しい心を育てたいという願いのもと、「子どもたちに聞かせたい創作童話」を募集いたします。

- 1 応募資格 高校生以上（16歳以上）の方でアマチュアに限る
- 2 作品の種類 創作童話、体験談、地方に伝わる民話に題材を得た作品などの「子どもたちに聞かせたい話」
- 3 応募規定
 - ☆ 第1部 保育園児、幼稚園児、小学校低学年向けの作品
400字詰め原稿用紙（縦書き） 10枚～15枚
 - ☆ 第2部 小学校中、高学年向けの作品
400字詰め原稿用紙（縦書き） 15枚～20枚
 - ☆ 表紙は枚数に含めません。各ページにページ数を記入してください。
 - ☆ 原稿はA4判の400字詰め原稿用紙を使用し、右肩をとじてください。（ワープロ原稿も可）
※ワープロ・パソコン原稿は、A4横位置で20字×20行縦書きで印字すること
 - ☆ HB以上の濃い鉛筆か黒インクまたは黒ボールペンを使用すること
 - ☆ 作品は自作未発表のほかの童話賞等へ応募中の作品でないものに限り、（公募で入賞した作品等の内容を加筆、訂正した場合も応募できません。）
 - ☆ 応募は、各部につき一人一作品に限り、文体は自由です。
 - ☆ 表紙に、第1部・第2部の別、作品の題名、住所（郵便番号も記入）、氏名（ペンネームの場合は本名も書き添えること）、性別、年齢、職業（学校名）、電話番号、お持ちの方はメールアドレスを記入してください。
 - ☆ 人名、地名等の固有名詞には読み仮名をつけてください。
 - ☆ 民話、伝説等を題材とした場合は、その出典を明示してください。
 - ☆ 応募作品は返却いたしません。
 - ☆ 応募作品の著作権は応募者に帰属。主催者は入賞作品を冊子にまとめる権利を有する他、ホームページ上で作品集を公開します。
 - ☆ 作品選考に関するお問い合わせには一切応じられません。
- 4 応募の締切 令和6年9月13日（金）消印有効
- 5 選考委員（50音順・敬称略）
 - 勝本 祥治 （鹿児島市立坂元台小学校長）
 - 加峯 美由紀 （鹿児島市立草牟田小学校長、鹿児島市学校図書館協議会会長）
 - 久保田 里花 （児童文学作家、椋鳩十研究家）
 - 小山 陽子 （鹿児島市立図書館図書係主幹兼図書係長）
 - 竹ノ内 三千代 （鹿児島市立喜入小学校長）
- 6 入選者発表 令和6年11月下旬頃
かごしま近代文学館かごしまメルヘン館ホームページ上にて発表します。
結果通知は、入選者のみとさせていただきます。
- 7 表彰式 令和7年2月23日（日）
- 8 賞
 - ☆ 特選（各部1編）…賞状及び楯、賞金5万円
 - ☆ 入選（各部3編）…賞状、賞金3万円
 - ☆ 佳作（各部数編）…賞状
- 9 主催 鹿児島市、鹿児島市教育委員会、公益財団法人かごしま教育文化振興財団

応募状況

■ 応募総数

第1部	108点
第2部	90点
総数	198点

■ 年齢別応募状況

部門別	第1部	第2部	合計
16～19歳	4	2	6
20～29歳	2	3	5
30～39歳	10	7	17
40～49歳	17	13	30
50～59歳	13	13	26
60～69歳	34	24	58
70～79歳	18	19	37
80～89歳	8	9	17
90歳～	2	0	2
合計	108	90	198

■ 都道府県別応募状況

都道府県	応募数	都道府県	応募数	都道府県	応募数	都道府県	応募数
北海道	3	東京都	32	滋賀県	2	香川県	0
青森県	0	神奈川県	6	京都府	7	愛媛県	0
岩手県	1	新潟県	0	大阪府	25	高知県	0
宮城県	2	富山県	1	兵庫県	17	福岡県	10
秋田県	1	石川県	0	奈良県	1	佐賀県	0
山形県	0	福井県	1	和歌山県	3	長崎県	1
福島県	1	山梨県	1	鳥取県	2	熊本県	1
茨城県	3	長野県	1	島根県	0	大分県	1
栃木県	0	岐阜県	6	岡山県	0	宮崎県	2
群馬県	1	静岡県	2	広島県	3	鹿児島県	23
埼玉県	6	愛知県	9	山口県	2	沖縄県	4
千葉県	11	三重県	3	徳島県	3	その他	0

選考委員

(五十音順)

- 勝本 祥治 氏 (鹿児島市立坂元台小学校校長)
加峯 美由紀 氏 (鹿児島市立草牟田小学校長、鹿児島市学校図書館協議会会長)
久保田 里花 氏 (児童文学作家、椋鳩十研究家)
小山 陽子 氏 (鹿児島市立図書館図書係主幹兼図書係長)
竹ノ内 三千代 氏 (鹿児島市立喜入小学校校長)

表紙絵・さし絵

(五十音順)

- 井上 周一郎 氏 (鹿児島市芸術文化協会会員)
上村 比登美 氏
中間 有紀 氏
榎本 容好 氏 (鹿児島市芸術文化協会会員)

「子どもたちに聞かせたい創作童話」 第46集

発行 令和7年2月
編集者 鹿児島市
鹿児島市教育委員会
公益財団法人かごしま教育文化振興財団
鹿児島市城山町5番1号
TEL (099)226-7771
印刷所 (株)あすなろ印刷
鹿児島市城西2-2-36-205
TEL (099)214-3757

